明治廿六年五月五日發刊

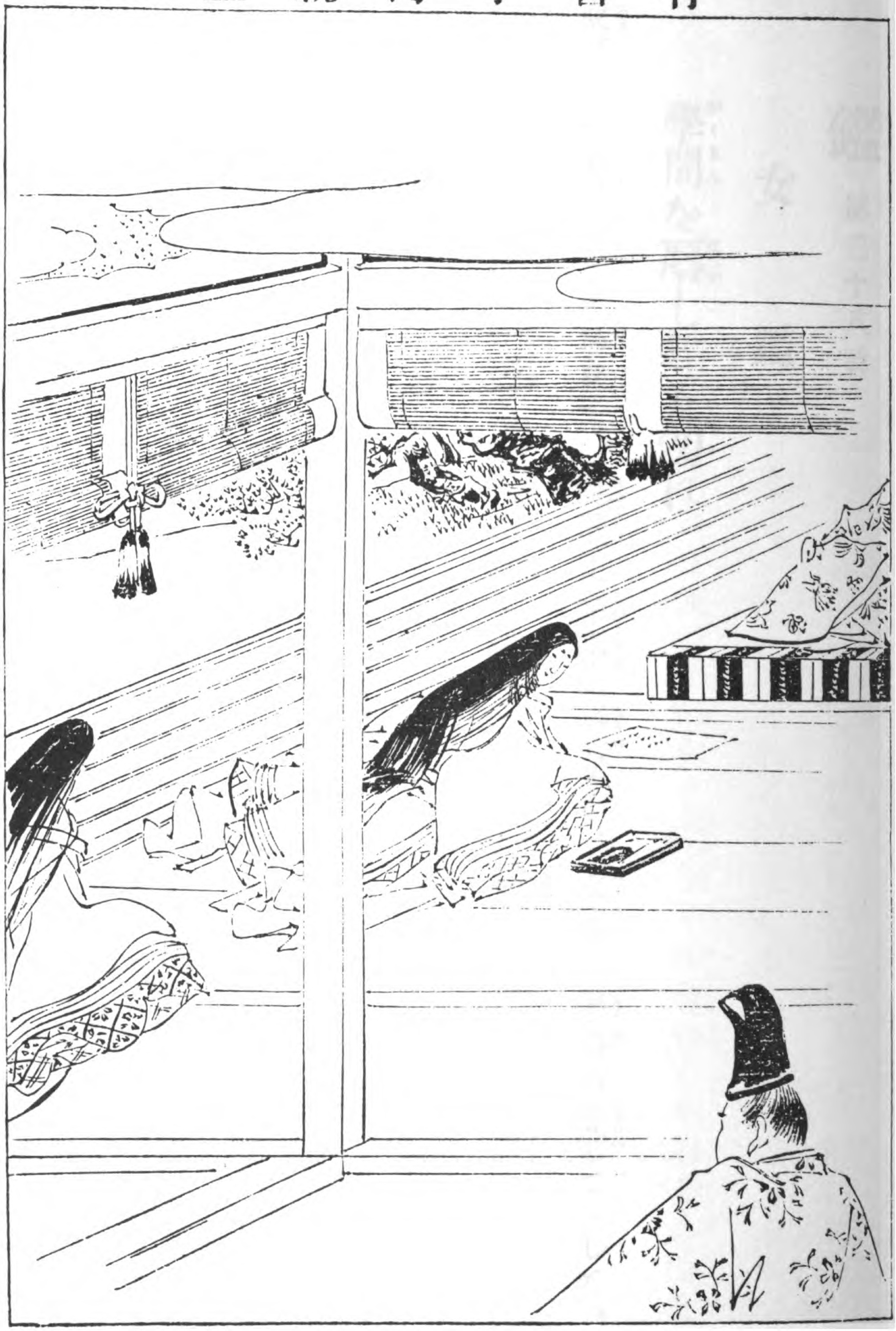
女鑑

第三十八號

東京國光社

女鑑第三十八號目次

有智子内親王



女鑑

學問を辱しむる勿れ

古、女子を教育するに當りて、郷里に庠序の設なく、國郡に學校の備なくして、唯、寺子屋、或は少し學識ある人の許に托して、女大學、庭訓往來の如き者をのみ習はしめて、單に其の教師の意のまゝに放任したりしを以て、頗不完全なるものなりき。故に大方政治、法律、經濟、理化學等の智識を備へたるものなく、動もすれば、卑屈に流るゝ風を生じたり。然れども、女子の女子たる職分を守り、能く貞操に、能く節烈にして、道義を破り、德行を乱り、廉耻を顧みずして、恬然たるものは少なかりき。

近時に至りては、文運日に開け、教育月に盛に、僻遠陬地と雖も、至る所に庠序の設あり、學校の備ありて、樵夫牧童も、學を修めざるものなきに至れり。故に一度口を開けば、政治を是非し、法律を論難し、經濟を說き、理化を語る。其の言ふ所、悉く理に當り道に叶ひて、古の大人と雖も、未だ備へざりし智識を備へたるを以て、動もすれば、驕傲に流るゝ俗を成すに至れり。然れども、古の女子の如く、能く女子の女子たる職分を守るもの少なく、貞操節烈の如何なるものなるかは、常に口にして躬に行ふものなく、道義を守り、德行を謹み、廉恥を重んずる人を見ては、頑固と嘲り、舊弊と笑ひて、之を擯斥するもの、今日比々として皆然らざるはなし。

吾人聞く。昔は人心腐敗し、風俗壞乱する時は、大に文教を興して、之を矯正し

たりと。而して其の結果を、歴史上によりて見れば、果して良習美俗となるに至れり。然るに今は、文教此の如く盛に、教育此の如く整備せるにも係らず、貞操、節烈、道義、徳行、廉耻を顧みるものなく、却りて古の、不完全なる教育時代にも劣りたる腐敗壊乱の風俗となれるは、果して如何なる所以なるか。實に奇怪の至りなるに非ずや。

其の源因には種々あるべけれども、時勢の然らしむる處も亦大なるべし。家庭の教育の關する所も亦大なるべし。教育の方法、其の宜しきを得ざるものも亦少なからざるべし。然れども、吾人は、又他に大なる源因の存するあるを見る。何ぞや、教育を受くる女子の心得是なり。其の故は、古の女子は、學問を以て、躬行實踐の最大要具と思へり。今の女子は、學問を以て、利を營む最大要具と思へはなり。

故に其の源は、同じく學問なれども、其の爲る所に至りて、大に反對するを以て、此の如く背馳する結果を見るや疑なし。

夫學問なるものは、種々の智識藝能を覺ゆる爲のみにあらず。先我が身を修むるを第一とす。身修まらざれば、假令萬能の智識ありとも何かせん。さる人は、書物のみ。器械のみ。何ぞ貴ぶに足らん。何ぞ賞するに足らん。我が身を修むるには、萬般の智識藝能を必要とす。智識なければ、事物を判斷すること能はず。藝能なければ、種々の作用をなすこと能はず。事物を判斷する智識なく、種々の作用をなす藝能なければ、身を修むるに難し。故に學問する女子は、其の讀む所、習ふ所のものは、皆躬行實踐して、先我が身を修むる目的を以てして、利を營む要具と思ひ誤るべからず。然る時は、おのづから貞操に、節烈に、道義、德行、

廉耻を重んずるに至り、智識藝能は備はり、身は修まりて、一の欠点なき女子となり、古の女子の上に位し、其の地位も高まるに至るべし。教の庭にいそしむ女子等は、決して此の目的を誤ること勿れ

論説

琉球女子風俗の一班（第一）

椿蓁一郎

余さきごろ、沖縄、大嶋の二島を巡回して、那覇、首里の市街より、村落邊僻の地に渉りて、十有餘日間の旅行をなせり。元來琉球は、南洋中の一孤島にして、古來内地との交通少く、殊に女子に至りては、互に往來せしことさへなかりし程のことゆゑ、其の風俗の差違、最も甚しく、吾々内地人の眼には、奇異の觀をなす

こと少からず。但主たる公務の取調にいそがはしくて、餘事にかゝはる暇なければ、大かたは餘所に見すごし、詳に記するほどのことは知るを得ざりしも、今爰に女子の風俗に關し、記憶に存する二三の事を掲げて、諸孃に紹介仕らむ。

舊來此の地士人の觀念には、女子の敎育は、全く無用の事と信じ居たるものゝ如し。故に女子に學識なきは勿論、方今は敎育の事業も、追々發達し、到る所、小學校の設ありて、就學の勸誘怠慢なしといへども、女子にして修學するものは、仍寥々として曉天の星のごとし。男子は尊くして、女子は卑しく、男子は逸して、女子は勞す。（市街の地を最然りとす）上流の婦女は、常に深閨中に屛居し、濫に外出することなく、又痛く他人に面會するを忌むが故に、多年の間、其の家に往來交通するものといへ共、曾て一見することなし。たまく外出するあれば、駕に乘り簾を垂れ

て、容易に路人をして窺はしめずといふ。然れども、中流以下のものに至りては、さることとなし。

纔に二三十年の前時を顧みれば、内地もまた斯のごとくなりしなり。今此の地方の狀態を目擊して、坐に今昔の感にたへず。然れども、今や　皇威八方に輝き、德澤四海に洽く、此の地の敎育も、駸々として日に進むの勢なれば、多年を費さずして、斯の陋習を一掃し、後の此の地に遊ぶものをして、今の內地を視るが如き感を發せしむるや必せり。

凡そ女性の勤苦辛勞すること、世間此の地方の如く甚しきはあらざるべし。村落に於ては、專農業を事とするがゆゑに、纔に半身を蔽ふばかりの短褐を纏ひ、徒跣にて山野を跋涉し、田圃を耕耘す。其の砂糖を製し、家畜を牧し、物品を運搬

する等、男子と異なることなし。那覇は商業の地にして、現今縣治のある所、首里は舊王城の跡にして、今仍有祿の士族、多く住居せり。共に縣下の大都會、最も殷賑の場所なるが、其の風習に就きて、特に吾人の奇とする所のものは、女子の勞働なり。凡そ家政を經紀し、店舖を主管し、或は街衢に行商し、或は人夫に雇はれて、物貨を運送する等、なさゞる所なし。士族の妻女といへども、自ら絲をつむぎ、之を染め、紬木綿を織りて、市に持ち出で、之を鬻ぐを常とす。兩地各市場あり。日々多數の商賈、簇々八方より蟻集し來りて、廣き地面を蔽ふばかりに露店を張り、百貨を貿易することとなるが、賣るもの、買ふもの、運送するもの、いづれも婦女ならざるはなし。忽其の光景を見るときは、宛然、身は女護の島にあるかと疑はるゝばかりなり。而して老幼は云ふまでもなく、妙齡の少女といへ

ども、衣裝を飾らず。塗澤を施さず。髪は萬人一様、固有の螺髻にして、唯身分に應じて、簪に銀、眞鍮等の別あるのみ。舊藩制に王族は金士族は銀平民は眞鍮の定なりし由にて今も此の風を墨守す衣服は内地と大同小異、其の異なる所は、身はゞの廣きと、帶を用ゐざると、あはせめを細ひもにて結ふ袵衣やうの上衣を襲ふのみ。おもに飛白、又は縞の木綿織なり。禮儀の席には、更紗染に似たる形付け木綿を用うと云ふ。脂粉を施し、帶を着るは、娼婦に限る。帶は内地の男帶の如し樂器には、蛇皮線あり。淨瑠璃やうの歌曲、はやり歌等あり。また舞踏の類も數多あれども、皆男子の嗜む所にして、娼婦の外は、女子にして之を解するものあることなし。斯の如く、女子の儉素に安んじ、姿容を飾らず、塵埃にまみれ、風日に晒され、終歳役々として、勤苦に服するにも拘はらず、男子は反て、放縦遊逸にして、餘財あれば、則酒を飲み、輿に酖り、或は公然花柳の巷に出入して、而

して人之を怪まざるのみならず。却て其の婦のはたらきあるを稱揚するとかや。畢竟氣習の然らしむる所とはいふものゝ、琉球女性の境遇も、亦憫むべきものならずや。

余嘗て歐米女子の奢侈惰慢、常に有髯丈夫を頤使氣使して、憚る所なきを惡む。然れども、此の地の風俗の如きは、所謂過ぎたるはなほ及ばざるが如きの類にして、共に仲庸を得たるものと云ふ可からず。敎育の事に從ふものゝ、宜しく警省すべき所なりとす。

女子要言第二篇(十)

三輪田眞佐子

其の三　女子の藝業

諺に曰く、十人十色にして、蓼を食ふ虫も好き〴〵と。信に然り。今女子の才藝、及び業務に就いて、之を考ふるに、甲曰はく、女子も男子の如く、雜鬧なる社會の表面に顯れ、男子と共に、其の智を爭ひ、其の力を較し、生存競爭、優勝劣敗の實劇を演じ、總て社交的生存するを以て、本面目となすべしと教唆するあり。乙曰はく、終始清朗なる天空を眺めずして、暗欝たる奧室に、足を屈し首を縮め、道理を言はず、是非を辨ぜざる愚鈍を學び、殊更良人を助くる能はざるは勿論、日常の經濟も、自ら處理する能はずして、唯夫の肩を摩し、腰を按ずるのみを知る如きに止まるべしと希望するあり。蓋し甲に從はんか。乙を守らんか。實に其の時代に身を置く諸孃、大に迷ふものあらん。然れども、憂ふる勿れ。人には天理といふものありて、不易不動の準標存す。故に斷乎として之に從ひなば、毫も

他人の毀譽褒貶は顧みるに足らず。其の天理とは、天道の命ずる性に適する法則なり。翼あるものは、飛ぶの性あり。鰭あるものは、游ぐの質あり。各其の自然に從うて動く。若男子にして男子の業をなさず。女子にして女子の業をなさゞる時は、是れ人をして、魚鳥に如かざらしむるものなり。乃ち亦拱手無爲にして、五十年を消過せんか。尚雌雄共に働く燕雀にだも耻づべきものなり。否文明女子は、是非、社會の事務、半果す覺悟なかるべけんや。而して女子の標準、及び區域は、易經の、女子は位を内に正しうすとの一語を以て、殆ど盡くせり。若之に滿足せさるものあらば、是陰陽消息等、宇内自然の法に典りて、聖人の立てし敎を、徒に批難するものと言はざるを得ず。實に此の敎は、今日時勢のため、少しく取捨せさるべからずと雖も、大本は依然と守るべきなり。

蓋し人智の進むに從うて、或点に於いては、大に天理に近づくものあるも、他の点に於いては、之に遠かるものあり。故に反て古代の風俗、及び慣行にして、其の目的に協ふもの多し。即ち女藝の如き是なり。我が尊ぶべき　天照大神にして、尚且かしこくも、織物をなし給ひしとかや。況んや我々臣民の女子をや。此、を以て推すも、女子の内事を勤むるの天然なるは疑ふべからず。豈女子の體制より、今更論難するを要せんや。若唯其の體制より論ぜは、女子の今日柔軟なるゝ、自ら勞を避け、力を用ゐざるより、習慣變じて遺傳となり、遂に今日あるものなり。仮に女子は、男子同等の体力なしとせば、焉ぞ板額出で、巴顯れんや。殊に驚くべきは、習慣的遺傳なり。譬へば創世時代は、男女二人にて子を育てしは、男子に乳房あるを以て知るべし。凡そ人の身体に、無用の機關なし。然るに、今日

男子に効用なき乳根を存するを見れば、必ず昔日は、子を育てしものなるを知るに足る。而して其の后、女子のみ子を養ふより、自然に、使用せざるもの、欠失する原則により、今日の如く、殆ど其の痕跡を殘すに過ぎざるに至れり。故に見育も、強ち女子の天職とは言ひ難し云々と。奇々、妙々なる附會の反對論者なきにしもあらず。然れども、是全く、取るに足らさる言語なるも、今日の如き議論時代の女子たるもの、一瞥を要すべきものなり。故に、吾は、故ら世の奇論を一言茲に挾む。請ふ吾が意を失ふ勿れ。神皇正統記に、凡そ男夫は、稼穡をつとめて、おのれも食し、人にあたへてうゑさらしめ、女子は、紡績を事として、みづからも衣、人をしてもあたゝかならしむ。いやしきに似たれども、人倫の大本なり。と云はれたるは、公平無私に、男女分業の自然なるを說かれたり。加之、西洋も

同じ人間の住所なりせば、同一の次第あるなり。彼の女子なる文字「ウーマン」は、「ウイブ」即ち編むと云ふ字、「マン」即ち人と云ふ二字を結合して、成立せしものなりとかや。亦以て、天然に女子は、内事を營むべきものなるを知るに足るなり。且歐米の今日とても、必ず女子は、内事を主とすべしとは輿論なり。之を證せんため、米國の「セー、キッチン、ガーデン」會の家政學序文を抄載せん。曰はく、社會の需用に應じ、此の書を著すに至れり。要するに、女子の本領は家内にあり。而して家政の智識は、一として女子の身を處するに、莫大の補助を與へざるはなし。近頃之を誤解するもの多し。然れども、後進の孃等は、家政を以て、賤しきものとなすを止めよ。某婦人、能く當時を論ぜり。曰はく、善良なる教育を受けざる女子、動もすれば、己の本分を賤劣なるものと信じ、男子の業務を見て、以

て男尊の原因と羨む。實に斯の如き流行より、家事の勉勵を惰れり。然れども、知るべし。家政學を學ぶは無益にあらず。否女子をして、一家團欒の幸福快味を得しむるものなるを云々とあり。請ふ我が現今の女子、確乎と彼れの實情をも知らずして、徒に妄想する勿れ。門に入りて、未だ堂を窺はざる笑を求むるなかれ。

是を以て、古今有識と云はれたる人は、異口同音に、女子は內事を主任とすべきものなりといへり。吾少時、束修を捧げ、音博士松苗先生の弟子たらんとて、先生の門に至れり。先生笑を含んで曰はく、余既に一兩人、女子の弟子を許せり。其等皆文章を讀み且作るは、巧みにして男子に讓らずと雖も、家政一切を心得さるは勿論、自ら自らの裝ひさへなす能はず、反て世の擯斥を買はしめたり。由

りて、余は尊き人を不具者にせりと、心密に悔い居り。這は全く人に由りけりと雖も、足下此の顰を學ぶ勿れと。吾此の說を聞きし以來、未だ讀書を廢せずと雖も、少しく內事女藝をも注意するに至れり。故に吾は、今にして先生、吾に女藝を教へずして教ふと、感謝に堪へず。其の后、吾が師の夫人紅蘭女史、吾に畫法を教へ、其の印章の字句を撰らぶに當り、鍼綫餘事なる四字を以てす。吾尙今日之を使用し、恒に女史の高見に服し居り。吁女史は、活潑の人なり。而して尙此の定見あるかな。

史談

有智子內親王

三木五百枝

有智子内親王は、嵯峨天皇の皇女におはしまし、御母を交野女王と申しまつれり。親王、手弱女にこそあられつれ。頗る史漢に渉り給ひ、兼ねて作文の道をも善くし給ひて、益荒男も及ばぬばかりにおはしけり。弘仁のはじめ、賀茂の御社に齋王を置かるゝ事となりしが、親王、始めてそをつとめ給へり。十四年春二月、父の天皇、齋王の御座所に幸あらせ給ひ、花の宴開かせ給ひぬ。やがて、扈從の文臣に命ごとありて、春日山莊といふことを題にて、詩を賦らしめ給ふ。親王も、またその席に列り給ひ、同じく探韻せられけるに、塘光行蒼といふを得られたり。即ち筆とりて、立どころに書出で給へるを見るに、左の詩なりけり。

寂々幽莊水樹裏　仙輿一降一池塘
栖林孤鳥識春澤　隱澗寒花見日光
泉聲近報初雷響　山色高晴暮雨行
從此更知恩顧渥　生涯何以答穹蒼

この時、御年僅に十七にぞおはしましたる。天皇甚く賞で褒めさせ給ひ、三品の位を授け、御製の詩をさへに、書きそへして賜ひたり。

忝以文章著邦家　莫將榮樂負煙霞
即今永抱幽貞意　無事終須遣歳華

尋いで、文人を召さむをりの資にとて、百戸の御封を賜へり。天長八年、齋王の職を辭し給ひ、それより嵯峨の西莊に住み給ひき。仁明天皇御即位の後、二品に進み給ひ、また伯耆國會見郡なる荒廢の田一百廿町を賜はり給へりしが、承和十四年十月に薨じ給ひき。御年四十一、親王、性貞潔におはしまし、遺言して葬の儀を薄からしめ、葬の御使を受けざらしめ給ひき。天皇、ろのかみ滋野貞主等に詔して、詩賦を撰むしめ給ひて、經國集と名づけられしが、親王の御詩、また多くその中に入りたりといふ。

えい女　　夏山茂

夫は早く死し、家は貧に乏しく、艱苦薄り至るも、斷然再醮の勸を斥りぞけて、よく貞操を全うするもの、往々にして之あり、難に臨み、變に處して、身を兇暴の爲に汚されず、遂に節烈に死するもの、時に或は之ありと雖も、黽勉事に從ひ、將に廢絕

せんとするを興し、既墜の家政を挽回せし婦女に至ては、甚だ少なきが如し、今吾が聞き得たるは、この少數中の婦女にして、げに感ずべきものなれど、左に掲げぬ、

飛彈國益田郡の尾崎村に、二村清助といふものあり、その妻えい女は、同郡湯の島村の武川德左衛門の妹にて、清助が妻となりて、男子三人をうめり、清助農業の外に、酒造をかね、遣ふ人もあまたにて、晝夜事多き家なるに、えいが三十五歲よなれるとし、清助病にふしけるが、月日經れども、起つと能はず、荏苒うち過ぎて、つひになくなれり、そのとし長男藤兵衛十一歲、次男忠七四歲、三男梅吉は分娩れていまだ程もなき稚兒なり、えい三人の子を抱きて、農商の兼業を、もとのまゝにつゝけゆかん事、おぼつかなけれどとて、親族集ひて、幸ひ清助の弟、今獨身にてあれど、これをいれて後夫とさせ、子等の成長をまつが然るべし、とかたらひ合せて、えいにそのよし示談に及ひげるに、えい答へけるは、小兒の養育は、母たる者の當然のつとめなれど、申すまでもなし、家業の事、かくの如く、亡夫の取り廣め置きたるを、おのれ女の身を以て、たもち侍らんは、もとより大任なれども、夫死して、子の幼なきほど、妻の其家を修むるは、世間一般のならひなれど、おのれ愚な

る身にて、行届かぬがちには侍るめれど、今さら後夫にまみゑん事は、本生の父母、の敎にもたがひ、且世間へ對しても、耻づべき事なれど、この一件は、各がたの衆議にも、ゑ從ひ侍らずと答へけるに、親族ども思へらく、夫婦の際の事は、あながちにおしてもすゝめがたし、また外に、えいが好ましくおもふ者の、あるまじきにもあらじと、ゑむらく打棄ておき、その後一族の中にて、これらや然るべからんとおもふ男を見たて、さらにすゝめけるよ、いよ〳〵受けひかねど、みなえいが節義に感じ、このうへは、心任せにして、兒等を育み、家を續がせくるゝやうにと、言ひきかせけるに、えいいたく歡び、これこそ愚なるわらはが願ひに侍れ、といひて、さて一族の者にかたりけるは、夫の世にありしほど、凶年うちつゞき、活計にわづらひありて、負債のいで來たるを、此まゝにさし措かむ、家の衰へともなりぬべし、はやくその返濟の方法をもすべしといはれしが、不幸にしてみまかられたり、各帳簿につきて、取りゑらべ賜はらむ、年を追ひて、少しづゝも償ひ侍るべし、といへるにより、一族立ちあひて、點撿するに、おもひの外の大借にて、金六百圓にあまれり、これよりゑひ、ことに奮發勉勵し、夙におき夜にいねて、家事のみに身を

委ね、農作をはじめ、造酒養蠶その外、いさゝかの餘業に至るまで、みづから心を配りて、日々帳面の計算をも、えい一人の手して、詳かに記しつゝ、晝夜盡力せしかど、わづかに十年をまたで、負債をことごとく返濟し、これに隨ひて、家產もよく立直り、過ぎし辛未の年には、餘財を以て、酒倉をも建替へけるほどに、いつしか兒等も成長せしかど、筆算の修行怠りなく、これをつとめさせ、內外の和睦、親疏の交接、間に髮をいるゝばかりの、足らざることもなくて、夫の過ぎしより、十餘年遺託にたがはず、貞操を守り、萬事に謹愼して、家業を恢復せしは、僻遠山村の者にしては、げにめづらしき節婦なり、

家政

三笠舍主人

看護法捷徑（十五）

第二篇　治療の輔助

（一）用藥法

一藥の用ゐ方は、治病上、最も大切の事にして、看護者の亦最も細心注意して、從事すべき要務なり、

二藥に、内服藥、外用藥、の二種あり、内服藥には、白色の附箋、外用藥には、赤色の附箋を貼て、病者の姓名、及藥の用法を、詳記するを法とす、又劇藥には、用法の右上方に、注意の二字を附記するを法とす、故に、病者に藥を與ふるには、必ず先、其附箋に記載しある、用法、分量、時刻、等を熟讀して、誤用なき樣に與ふべし、

三水藥は沈澱を生じ易く、或は藥によりては、上層と下層と、別々になるものなれば、與ふる前には、必藥瓶を振回して、能く混和せしむる事肝要なり、爾後、小盃、又は匙に移し注ぎ、水を飲ましむる法の如く、後より病者を抱き起して、徐に口内に移し入るべし、若病者首を擡る能はざる時は、長嘴ある小盃を用ゐ、或は硝子管、又は麥幹を用ゐて、吸飲せしむべし、若人事不省と爲りゐるものには、特に注意して、一層徐々に藥水を口に移すべし、然らざれば、氣道に入るの恐あり、

四　散藥は、匙若くは小盃に移し、少許の水又は湯を加へ、能く攪き混せて與ふべし、若し藥の一部器底に遺る時は、更に少の水を注ぎて與ふべし、總て散劑は、口壁、及齒齦等に附き易きものなれど、服用後、更に水を與ふるを良とす、

五　丸藥を與ふるには、最初先、水にて口内を濕し、丸藥を舌の中央に置き、更に水を與へて嚥下せしむべし、

六　滴劑（藥液を砂糖、麪麭、若くは水に滴加して與ふるもの）を與ふるには、處方箋に記しある滴數を違へず、數へて與ふべし、其法は、先藥瓶を栓のまゝ、一旦倒にし、次で横に爲し、法意して、少許の藥液を瓶の頸部に導きたる後、徐に栓を拔き去りて、一滴宛落下せしむべし、此滴劑は、多くは劇藥なれバ、極めて注意すべし、又其性多く蒸發し易き故に、滴して後は、速に服せしめざれど、藥氣飛散して、効なき事有、用後は、速に栓を固くし、火氣なき所に置くべし、

七　惡味の藥を服用したる後は、直に少許の冷水を、含嗽、若くは飲用せしむべし、時宜に依りては、沙糖を少く加へ與ふも可なり、或は麪麭、若くは淡泊なる菓子の小片を、同時に咀嚼せしむるも可なり、又散藥の飲み惡きものは、「ヲブラート」

と稱ふるものに包みて、與ふれば呑み易し、

八　病者藥を服用したる後、其眞に嚥下したるや、否やを知るには、服藥後、一二言語を發せしめて試むべし、未だ嚥下せざるものは、言語を爲す事能はざるもの也、是れは、小兒又は病院などにて、患者藥を嫌ひて、間々眞に嚥下せざるものある時、此法にて試みるべし、

九　藥は總て與ふる時刻を違ふべからずと雖、病者用藥の時刻に、偶睡眠する時は、醫士の特更に時刻を定めたる藥劑の外は、强て喚び覺して與ふるを要せず、自然に覺るを俟て、與ふべし、(醫士の特受に時刻を定めたるものは、喚起して與ふべし、)

十　病者若し、藥を嫌惡して、服用を拒む時は、懇に說諭すべし、猶肯せざる時は、醫士に報じて、其指揮を乞ふべし、

十一　藥の外用法は種々あり、次の如し、

料理法增補(一)　待月菴

新年發會一月初旬

懷石

向附　鮭の鹽引、おろし大根、水松、しら酢、

汁　ねいも、しめじ、かいわり菜、

煮物椀盛　鴨、獨活のたんざく、鱈、青昆布、色紙、いはたけ、

燒物　小鯛幽庵やき、

吸物　神馬草、

八寸　取肴、さき海老、長露木芋、

已上

おなじく

向附　口しは鱈、角作り子もぶし、山葵、配酢、

汁合せみそ、くらたち菜、

椀盛　鴈、卷ゆば、牛蒡大輪切、はうれん草、伊勢海老、

燒物　餘王魚しは燒、

吸物　水せんじ海苔、
八寸　焼鳥、くわゐひしぎて、
おなじく
向附　からすみ、鮭、わさび、蜜柑酢、
汁　合せみそ、獨活、笹ふき、芹、鴨の身たゝき、
椀盛　饅頭麩、薄くず海苔かけて、山の芋、
焼物　小鯛、味噌漬、
吸物　筍小口切二つ、
八寸　鮑小角、又は焼、蕗のたふ、煮しめ、
おなじく
向附　鮒糸作り、寒ちさ、いはたけ煎酒かけて、
汁　白みそ、小蕪葉つき二つ、干瓢、
椀盛　鴨身たゝき、平たけ、すだれ麩、
焼物　鯛又は蒸、

吸物　小梅ぼし、釘生薑、
八寸　長芋たんざく、附燒、玉子、

家政雜事（二）

淺草海苔貯へかた、　淺草海苔は、とかく色變りやすく、香うせやすくして、貯へかたに困るものなり、東京にては、常に好みに從ひて得らるる故、ともかくもあれ、地方にては、遠來の珍物、次に記す法によりて貯へおかで、不時の需に應ぜんに、たよりよかるべし、

（一）まづ白米を炊りて、いりごめとなし、よく冷まし、（二）錫の壺の底に、其炒米を深さ二寸許りも敷き、（三）其上に海苔を紙に包みたるまゝ、竪にならべ、（四）なほ海苔と壺との隙き間、又海苔の上にも炒米を、澤山入れ、（五）さて固く封じておくべし、

注意、濕氣を忌むものなれど、梅雨の中には、壺を開かぬがよし、

かくすれど、夏秋を經ても、新しきものとかはるとなし、因にいふ、淺草海苔は、十月頃より取り初むれど、寒中に取りたるものを上品とし、翌年の春三月頃までに取らるゝなり、淺草海苔と名にはいへど、今にては品川、大森近き海の產

を第一とす、遠江の舞坂海苔、參河の渥美郡加治海苔、紀伊の加多海苔も、淺草海苔と同類のものなり、近頃仙臺産の甘海苔も亦佳し、

疊に油しみたるをとる法、　疊に油こぼれたる時は、即坐に水を多くかくれば油悉く水に浮くべし、この時手早く拭ひ取るなり、少し間あれば浮かず、その時は、飯粒をねりて粘を拵へ、油のしみたる廣さ程、紙にあつく粘をつけ、疊に張り付け置くべし、翌日紙を取れば、紙の粘、油を悉く吸ひとりて、疊に油の跡なし、この法は、油のしみて久しくなりたるにもよろし、又一度にてとれそこなひたるには、再びすべし、

附言、先回より家政雜事を掲げて、萬一を稗補せんとすれども、家政の事たるや、一人の悉く知り得るものにあらず、されば、われ〱の見聞の及ばざる所にして、甲地にありては、見なれ聞きなれて、何とも思はざる事も、乙地に傳へなば、非常に利することもあるべく、事甚だ少にして、誰れも〱氣付かざる事も、天下の廣き、悉く之をなさば、莫大に益することもあるべければ、讀者諸孃、家政に就いての高見あらば、一報の勞を惜しむことなく、續々報導して給へ、われ〱は紙上を以て、之を天下に紹介せん、

學園

本邦女子文學略傳（第二）

目黑和三郎

有智子內親王

（この內親王の御傳は、はからずも、史談にものせたるものと重複したれど、著者の苦心は、いと惜しきも、止むことを得ず、こゝのを省くことゝなしぬ、みん人、さ心得たまひてよ）

小野小町

古今集の序よ、小野小町は、いにしへの衣通姫のながれなり、あはれなるやうにて、つよからず、いはゞ、よき女の、なやめるところあるに似たり、つよからぬは、女の歌なれどなるべしとかゝれしよりこの方、六歌仙の內に、小町の名高く、小倉山莊に、花の色はの詠、色紙にのりし以來、百人一首の內、小町の名いちじるし、又その姿勢艶麗、絕世の美人なりしかた、權者として之を貴み、美人の例を引きいでんには、必まづ指を小町にかゞむ、故に兒童も亦よく小町の名を知れり、然れども、

その所出の詳なることは、今に於いて定らず、参議篁の孫にて、父は出羽守良眞なりといへど、或は出羽郡司良實とも、或は好實とも、又當澄の女なりともいひて、孰れか實なる、そは得て知るべからず、その和歌に堪能なりしことは、貫之の言、又は古今集、後撰集、大和物語等にのせたる歌につきても知るべきなり、又其等の書によりて、小町の、仁明天皇の時、宮仕への者たりし事も知らる、されど小町は、采女などにて、いづれかの郡司などの女にて、姿勢よきが爲に、京師に奉られしものなるべし、

世に傳へていふ、小町はその美貌を恃みて、心の内に、女御后などにもと思ひかけ居たりけるを、十七にて、母を失ひ、十九にて、父に後れ、二十一にて、兄に別れ、二十三にて、弟を先立てしかど、よるべなき身の、日々に衰へゆきて、はては道に食を乞ひ、野山にさすらひて、終りたりとぞいふなる、されど、こは玉造小町壯衰書といへる古きものに基きて、玉造小町と、小野小町とを同人とせる非事なり、玉造小町の事も、實事にはあらで、世の美貌を恃める婦人の戒に、戯作せしものなるべけれど、信ずるに足らず、又謠曲に、通小町といへるありて、深草少將といへる

男を作り設け、小町の事をかきなしたるものあり、されど深草少將といへる人、當時に見えざれバ、こも亦戯作ものたることと疑ひなきなり、(但この事は、先哲の種々の考もありて、事いと長き故、こゝには省きつ、)又小町、陸奥に至りて、八十島にて斃れ死したるを、在原業平、さる憚る事ありて、東國に來り、陸奥の八十島にやどりける夜、野中にて、

秋風の、ふくにつけても、あなめ〳〵、

といふ歌の上句を詠ずるものあるにより、そを尋ねしむれど、人はなくて、髑髏の目の穴に、薄一もと生ひ出でゝ、その風になびく音の、かく聞ゆるといふに、土人のいひける樣、小野小町、此の野に終りたれど、その髑髏は、小町のならんといへるを聞き、業平直に下句をつけて、

をのとはいはじ、すゝき生ひけり、

といひければ、次の夜より、その音聞えずなりぬといへり、これ亦あやしく、妄說なるべし、歌道にも名高く聞ゑ、且美人の譽も、たゞにはあらざりければ、從ひてかゝる說ども、起こりしなるべし、その他卒都婆小町、關寺小町などいへる謠曲も、

皆以上のたぐひなるべし、小町自詠の家集あり、没年も亦詳ならず、

附言、僧正遍昭は、在俗の時、良岑少將宗貞とて、美男の聞え高く、仁明天皇の藏人にて、御寵愛いと深かりしが、天皇御崩の後、直に出家せし人なり、小町ある年、清水に詣でゝ、この法師と和歌の贈答をなし、遍昭の返歌に、かさねばうとしいざ二人ねん」の句あり、又古今集に、清行、貞樹、康秀等と、贈答の和歌を載せ、皆操行に嫌あり、さそふ水あらむの歌は、康秀の、三河掾になりて下る時、小町を具すべしといへる返歌なり、又思ひつゝ寐ればやの歌は、業平を戀ひて詠み、色見えでうつろふものはの詠は、大江維章が妻となりしが、後に恨むることありて詠めりなど、(信僞は詳ならず)いひ傳へて、婦德を傷ふべき嫌、いと多し、好色といへることは、或は小町の事實なりけんもはかり難し、

日本文典(承前)

杉谷正隆

言語

言語は、人の思想感情を言ひ顯はすものにして、文章を組織し、意思を相通ずるも

のなり、故に言語にして、法に違ひ則に從はざる時は、大なる誤謬を生ずる事あり、苟も人にして、言語により、百般の事業を辨ずる者は、皆其の法則に從ふ事は、世界各國然らざるはなし、況んや一の文章を組織し、遠きに送り、後世に遺すをや、我が國は、昔より言靈の幸ふ國と、自ら誇稱せし丈ありて、他の各國の如く、數十萬の言語あるにあらず、僅に數萬言に過ぎざれども、其の用を辨ずるに至りては、聊か痛痒を感ずる事なし、是れ其の變化の甚しく、且應用の自在なるを以てなり、而して其の法則の如きに至りては、秩然として整ひ、粲然としてそなはれり、然れども、世を經、代を更ふるに至りて、おのづから法を破り、則に背くもの、亦尠しとせず、是れ文典を研究して其の誤を正さゝるべからざる所以なり、請ふ之より、其の要を摘みて說明する所あらん、

言語を大別して、左の二種とす、

體言

用言

體言に副はりて、其の意味を助くる所の短き辭あり、之を體言の助辭と云ふ、而し

て其の助辭を分ちて、左の二種とす、

體辭
用辭

又用言に副はりて、其の意味を助くる所の一種の短き辭あり、之を用言の助辭と云ふ、而して之も亦分ちて、左の二種とす、

體辭
用辭

故に我が國の言語は、體言、用言、體辭、用辭の四種より成れるものとす、今其の圖を擧ぐれば、左の如し、

- 言語
  - 體言
    - 助辭
      - 體辭
      - 用辭
  - 用言
    - 助辭
      - 體辭
      - 用辭

以上は、言語の成立を示したるものなり、

女服考（第十六稿）

有住齊

婚姻、冬は上着、間着、帶、白綾幸びし、上着の裏、白羽二重、下着肌帶のごとし、袷の時、白綾幸びし、さげ帶、同樣、下着、白羽二重、五月五日より、八月晦日迄、白綾、幸びし、ひとへ物、さげ帶、同樣、下着、白羽二重、六七月は、すゞしのひとへを重ぬ、婚姻に帷子着用の事なし、かつぎ、白練緯、ひとへ、畧は袷よもする也、寶づくしを、銀はくにて摺、これまでは、合盃の服なり、色直しには、白綾を紅にかへ、上着の裏、紅なり、むかしは、三ッ目まで、白を着し、三ッ目に色直しあるとも云、當時は、合盃濟めむ、直に色直しある也、老女は、上着白綾幸びし、間糸あや幸びし、帶は上着におなじ、中老は、上着綾紙、間着りんず、帶は綾を用ふべし、其次は、上着綸子、間着紗綾、帶あや紙、尙其次は、上着さあや、間着は羽二重、帶はあや紙、あとゝ次第を取りて、着すべし、色地、

白りんづ、間白、帯白しゆすなり、此服式にあらずといへ共、今改めがたし、式は地黒たるべし、

降帯、四月朔日より、九月八日まで用ふ、古は唐織を、八割か、六割にして用ふ、今は錦を用ふ、色さだまらず、はゞ二寸五分斗、長さ一丈二尺、いづれもかね尺にして用ふ、結様習あり、今は幅廣きを用ふ、

服紗帯、九月九日より、三月晦日迄、かひ取の下に用ふ、地はしゆす、りんず、縫入を式とす、色定らず、はゞはかねざし五寸斗、ふり袖の女は、後にて結ぶべし、昔さげ帯斗にて、服紗帯なし、

被、上下ともに、同じものなれども、寛永の頃より、子細有りて、關東にては用ひず、たゞ婚姻にのみ用ふる也、常に用ふる、かつぎ染様、習あれども、略して不記、京都にてはかつぎと云

腰巻、地練緯、色黒紅梅、實づくしを縫にすべし、其外何にても、好にまかせ、縫有るべし、裏紅、ねりぬき、六七月は、すゞし裏を用ふ、髪はこし巻の下へ入る也、其外着様習あり、

足袋、昔は晴の時不用、今はおしなべて、もちふるなり、今も堂上にては、用ひざるよし、

耳袷、みゝきぬとも云、又二の共云、又湯具共云、白羽二重式なり、湯に入玉ふ時も、是を結故に、湯具といへり、

素縫、地はねりぬき、色は紅にても、深紅にても、いろ〳〵の糸にて、縫をえたる也、貴人は是をかいどりに用玉ふ、りんずにも、すぬひ有るべし、

茶屋染、寛永の頃、茶屋宗理と云ふものゝ家にて、染出したる、もやう、茶屋は呉服所の名にて、四郎次郎長意共に三家也、紀州茶屋、尾張茶屋など、いづれもいさゝかのかはり有、下染えたると、せぬとなり、

茶屋辻、茶屋染に、縫をえたる也、是は茶屋四郎次郎家にて、好出したると云、むかし辻が花と云ふ染あり、此茶屋辻も、辻が花より、出たる名目ならん、

文字入、縫もやうの内に、久字を入るゝ事有、眞名文字にて、行文字斗、書たるを重とす、其次行かなませ、縫に、其次は、かな斗と、次第を分たり、是は老女、中老など、その品を分る料ならん、今は貴人も文字入を用ひたまふ、

綾、綾は織立たる糸、綾とりて見え、文ある也、浮糸にてはなし、裏にも文見ゆる也、今婚姻の時用ふるは、織物と云ふべきに、綾と云ふ事、僻事ならん、

綾紙、綾に似て、地薄く艶あり、文は表にばかり見えて、裏になし、

綸子、地につやあり、文は稲づまの内に、一枝の花あり、花なきも、又網代の如きを、菱墻りんずと云、綾子里牟須共書、又大紋綸子有、

紗綾、地綸子に似て、艶なし、是もひがきを式とす、又飛文あるを、とびさやと云、

繻子、地あつくして、甚つや有、文なく織も有、ぬめと云ふもの是につぐ、織色にあらず、染色也、

絹、地うすく文なし、上品なるを、羽二重と云、平絹と云ふも同じ、地あつく、糸太きを、りうもんと云、有文なり、

生絹、地うすく、生糸にておりて、ねらぬ也、生絹と云は、絹のねらぬ也、是とは別なり、

布、麻布なり、さらしたるもの故、是をさらしと云、奈良さらしを、上品とす、文なし、

絽、おりめ密ならず、すきてあり、よつて極暑に、用ふべきなれども、ねり糸にて、織たるとて、五八月用ふ、文有もあり、

縮、地ちゞみて有、是を越後の布と云、越後より出るを上品とす、六七月用ふる、畧義の品也、

縮緬、絹の類にて、地うね立、ちゞみてあり、羽二重を用ふべき所へ用ふる、畧義のもの也、文あるも有、

純子、地あつく文あり、又文の回りに、別の色の糸にて、へりをとりたるを、二重どんすと云、近頃のもの也、帯に用ふ、

毛織、色〳〵の糸にて、文を出す、地あつし、又金糸入りたるも有、繻珍も、いささか似たるものなれども、大に異なり、

漫錄

縣居遺文（つゞき）

楢の舍校註

やまと　物の名

見るまゝに薄霧たちてやまとはき
　あきのゆふべの色ぞあやしき

かくも、かくしたる例なきに侍らねど、猶やまとは、山外の意なれバ、やまとのこゝろのかくれかね候。されど、かくもいはぬにはあらねば、墨引きてまゐらす。

よどがは　物の名

いつのまにかくは逢瀬のたゆに兼
　このよどかはせし中のかは水

題のことは、いと多からぬをバ、かくの如く、一句の中にこむるを、よしとし侍り。

楢の舍いふ、いかに一句の中に、こめてよめどとて、かやうの歌は、うたにあらず。

わがたぬし、家居つくりたまうけるに、人人つどひて、歌よむと聞きてよみ侍る、

ことしより二葉の松をうゑおきて
　千とせの色はきみぞ見るべき

ことわりは、よく聞えて侍れど、二葉の松を植うるは、初春などにいふことに侍れバ、いかゞ。又、殿と申すは、天皇のみあらかを、ふるくはいひしを、後には大臣の家をもいふことゝなり、猶其外をもいふよしにはなりぬ。されど、おのれ如きものゝ家をいふことならねバ、家居とあらためて、まゐらするなり。

驛路

驛路は、七道の大道に、馬次の宿をたてゝ、おかるゝをいふ。公の用ありて通る官人は、公より、うまやの鈴をたまはりて通るなり。

戊申いふ、延喜式に、國々の驛の名見えたり。

九月とをまり三日の夜、空くもりて、やう〱月も見え侍りけれど、

宵よりも向ひつくせしかひもなく
くもるはつらしなが月のかげ

しら菊のつゆもはえなきこよひ哉
まち來し月のくもるのみかは

後の、こよひといふこと、むかしはなき詞にて、連歌などにはいへる意を、歌にも今はよみ侍るなり。然れど、少しなだらかなるさまゝも侍らぬは、同じくは、よみたまはぬがよく候はん。人々のよむことに候へど、なんと申すには候はず。又、菊を出して、こよひと候へど、十三夜の意は、あくまでたしかに候まゝ、引き直しぬ。又、長月のかげてふことも、後の世人は、皆々よみ候へども、是も同じくは、とくともし侍らぬことなり。長月とは、空の月にはあらで、いなかり月の畧にて、やがて月の名なり。それにかげといふは、空の月にとりなして、いふにて候なり。然れど、ことわりは明らかに候はぬことなり。されど、人のよむ事に候へど、なんといふ人は少く候へど、墨引きてまゐらすめり。人にも見せたまふには、白菊の歌を出したまひて、しかるべく候。

戊申いふ、九月とをまり三日の夜とあるべし。

升芳いふ、歌は二首ともに、みえぬよしなれど、

見えの下、ずなりといふことおちしなるべし。
楢の舍いふ、こは、いづれも題につきていはれたるなり。戊申またいふ、むかひつくせしいかゞ。

蓮の花を奉る歌

おくつゆもなみだもともに手向草
けふとる花のいろになりぬる

涙の色といふは、いたりてなげく時は、なみだ落つてふ意もて、かく引きなほし侍るなり。
戊申いふ、涙の上に、紅の字を脱したるなるべし。唐の李商隱が詩に、一夜芙蓉紅涙多と作れるにも、蓮花に紅涙をいへるなり。

櫻の花折りて人におくる、

吾のみに見むはかひなき色も香も
かゝるさくらの花のさかりを

一二の句、かくてはいひ過ぎて侍り。餘にことわりをいひ過ぐるは、後のことなり。よりて、歌の姿わろく、しらべくだ〳〵しく、きれ〴〵になりて聞ゆ。たゞ、やすらかなるこそ、たけ高く、しらべとゝのほり侍れ。此一二句は、いたづらにわれのみや見ん色も香も云々。よくもあしくも、かくぞ、やすらかにおもふまゝをいふに侍る。
戊申いふ、見むはかひなきとありては、てにをはたがふなり。見むはかひなしとあるべし。

山吹をうゑてよみ侍る、

うゑしよりくれ行く春の名殘だに
いはぬいろにもさける花かな

植ゑしよりとのみにては、うゑる意少し。此題に

ては、うゝる心を専よみたまふべし。

戊申いふ、うゑるは、うゝるとあるべし。

　藤さけるを見にまかりて、

ちりしきし花は流れていつしかに
　むらさきふかき池のふぢなみ

かくてもあるべけれど、池水はながれぬものなり。よて引き直し侍り。

池もみなむらさきふかきふぢ浪の
　なつによりたる宿になりけり

源氏をとめの卷に、花散里の御方は、夏のかげによれりとかきて、夏の草木を植ゑたることあり。此詞を用ひて、なつによりたるとはおき侍り。御料紙は、藤かさねそよく候はん。されど、此重は、たぐひも多くぞ候はんまゝ、かゝはらで、何にても、夏の色の中、おもてうらに紅を用ひ候重にて、出したまへ。

戊申いふ、いつしかには、いつしかもとあるべし、楢の舍いふ、源氏のことばならずとも、やすらかによみ下さんこそよからめ。初學のものには、聞きにくかるべきをや。また、この歌の上の句の二三は、よみあぐるに耳さはりなり。こころみたまへ。　（つゞく）

村田春海歌がたり（承前）

松野操雄

今の京となりての長歌は、古には、いたく、おとりぬれど、宇多、醍醐の御時より、花山、一條の御時までのひとは、なほ、めでたきうたも、たま

たまはありて、また、ひとつのすがたともいふべし。をりにふれて、そのさまを、まなむむも、あしからず。女房などの、長歌よまむには、今の世にては、萬葉ぶり、まねむむは、にげなきやうにも成りぬべし。女房などは、花山、一條の御時より、上なるひと〴〵のうたに、ならふべき事なり。堀河の御時より後のは、いたく、つたなし。をとこも、女も、まねびならふべきものとも、おぼえずなむ。

いにしへの長歌は、そのさま、たくみにして、ことをのぶる事ひろく、詞少くして、こゝろ深し。後の長歌は、其さまつたなくして、事をのぶる事せばく、詞いたづらに長くして、こゝろはあさく、おろそかなり。さて、古今集に、歌奉れる時の目録の長歌に、四季、戀、雜のことを、いひつらねたるは、ことわりさる事なるを、後の世の人、みだりに、それにならひて、なにざまのうたにも、春は秋は、霞の霧のとて、四季の事を、いひのべたる歌のおほきは、いかなる故ならむ。さるたぐひにもは、目録の歌なれど、よしあり。さらでは、四季のものを、いひならべむは、あらぬ事よ、いひならべむは、をかしきふしにもあらじかし。後の世のひとは、古今集の長うたのみをみて、こを長歌のすがたなりと、おもひあやまれるやうなり。こは、あまりに、つたなきならはしとやいはむ。かにかくに、後の世の人は、長歌を、おほくもよまず。こゝに、こころを、ふかくも用ひずして、おのが、よくもたどらず、よみもならはぬわざを、まひて、なすな

れど、いにしへ人のごとく、たくみに、ひろく、事をのべむことを、なしえぬまゝに、たゞ、いたづらなる春秋のものを、多くとり出でゝ、句の數を、おほく、つらぬめれど、その春秋のものに、よそへいへるふしをみるに、物とことどは、かはれど、みな、おなじこゝろなる事を、ひとうたのうちに、幾たびも、いひかへたるのみなるがおほし。すべて、後の世の長歌は、こゝろは、あぢはひなくしてあさく、詞は、やうなくしてながし。うちみるにも、うるさく、となへむにも、いとはしきものとやいはむ。

仁明天皇の、四十の御賀に、興福寺の僧の、長歌奉れる事を、國史にしるされたる所に、夫倭歌之體、比興爲先、感動人情、最在茲矣、季世陵遲、斯道已墜、今至僧中、頗存古語、可謂禮失則求之於野、故採而載之、と見ゆ。かゝれど、長歌のみにはあらず。歌のこと、はやく、すたれにたる事、明らけし。今の京の始、うたの事、すたれたる故は、嵯峨の御門、唐歌を、ふかく、好み給へりしかば、そのころのひと、たゞ、唐うたのみ、むねと學びければ、それより、百年あまりは、さるならはしのみにて、やまと歌は、こゝろをよする人も、絶えてなかりしなり。それより後、たえて、ふたゝび、おこれるは、業平朝臣のころより、やゝ、はじまりて、宇多、醍醐の御時に、ふたゝび、世にさかりに、もてはやす事とはなりにけり。そは、古今集の眞名序に、平城天子詔侍臣、令撰萬葉集、自爾以來、時歷十代、數過百年、其後和歌棄不被採、雖風流如野宰相、輕情如在中納言、而皆以他才聞、而不以斯道顯、といひ、また、適和歌之中興、以樂吾道之再昌、などもいへるにて、志るべし、

さて、かの興福寺の僧が長うたは、萬葉集のうたにくらぶれば、いたく、おとりぬれど、猶、いにしへのさまは、のこりたり。こは、奈良人などのうたをみて、まねびしものなればなり。古今集のころなる、ながうたは、いにしへをも學ばずして、

そのころの人のこゝろに、まかせたれど、おもむきも、いにしへとはかはりて、古におよばざる事、はた遠し。しかはあれど、古今集の比には、すぐれたる歌人、おほかりけれど、ひと〴〵、長歌を、きそひよむ事ならましかど、古とは、おもむきかはるとも、また、おのづからに、たくみなるひとつのすがたをも、よみいでむ人も、有りぬべかりしを、そのころ、長歌をむねとする人の、絶えてなかりしは、惜しき業なりけり。　（つゞく）

安永八年板 婦女髪様（承前）

井上頼文寄贈



丸やまびん
つりふねわげ



うはなで　ひしつと
さきかうがい



吾妻(あづま)びん　に　かいなでつと
茶(ちや)せむわげ

藻鹽草（つゞき）

楢の舍主人

一、てかけもの丶たぐひ、はしたなき人にて、われに不禮ふつとめをいたし、夫のちよう愛にほこりて、いろ〳〵あしき心かた、申分ありとも、隨分かんにんして、いかりの丶しることあるべからず。その筋の人には、たとへ、わけのちがひたる事にても、りん氣故と見ゆるなれど、氣毒なることなり。せひ不行跡不届のことにて、家法もみだるべきすぢの事などあらで、言葉正しく、心おだやかにして、そのあやまてるところを、さとしをしふべし。とく心なきものに、度々は無用なり。これも、こなたを正しくすれば、大かた不禮もなきものなり。

一、かやうのもの、緣付などいたさせんとする時は、我方樣にめしつかふものよりも、一入心をつけて、夫のこ丶ろにしたがひ、猶よくいたしつかはすべし。其外日夜のことなれど、しな〴〵書きつくすべからず。返す〳〵も、りんきは、女の性にあるものと知りて、せぬものときはむべし。むねにたくはへず、心の內安からんこそたのしけれ。

一、夫はうらつにて、大酒を好み、短氣、隨惡行多く、不孝不義のことあらんに、いかでしたがふべき。夫なりとても、みだりに共に惡事をとりもち、長せさすべきやうはなし。かやうの類は、つねにむつまじくして、心にさわがぬ樣に、より〳〵

いさめを入るべきすぢを、工夫して、いく度もいさむべし。いさめやうは、和をもとゝして、品おほからず、一色づゝも、善にあらたむるやう肝要なり。いかに、孔子の道をとき、ふるなの辨をかるとも、夫用ひざらんは、せんなきことなり。いかにもきげんを取りて、のみこみ用ふるやうに、いさむべし。をさな子のわるさを、ろれそこなふなどいへど、いとゞそこなふに、手々がいたむものありといへど、はあすがごとく、總じて親類子かた、家來にても、ほむれど悦び、そしれど怒り、異見は、いやがるものに、きはなりて、初心なる内は、いさめをいかり、こうの行たるは、一段よく言うけして、口上はいつはれども、こゝろには用ひず。大かた、人のいさめを實に入るゝ人は、すくなきものあれど、心を用ひて、その人のよくきき入るべきすぢを了簡していさむべし。ほむるにほこらず、そしるをいからず、いさめを入れて、わが非を知る人は、たのもしき事なり。これ、人のうへのみにあらず、われもかくあらまほしきことなれど、人のいけんをいふ時は、誠に滿足して、よく用ひきくべし。

一、めしつかふ人の心にいらぬことありとて、夫の聞く前、客のまへなどにて、恥かしめいかることあるべからず。利發がましく、ぜひをいひてきかせがましくいふこと、見苦しきものなり。いかにも、人のきかぬ所にて、そのあやまてるをなをいひ、とく心させていましむべし。

一、わかき時は、めしつかふものも、主人ながら、

心安がり、ものいひやすく、なれ過ぐる故、大かた不禮あり。おのが心まゝありて、上下のみだれとなるなり。年よりたる人は、用捨をしてなさけをくはへ、若輩には、ふびんをくはへて、をしへつかひ、中通りは、行儀をもとゝして、正しくめしつかふべし。

おもひぐさ

本居宣長翁の著されたる、おもひぐさといふ書の、寫本にてあなるは、ちかむかしより、やうやう、世にひらけたる烟草のこと共を、隈なく、かき出でおかれたる文なるが、珍らしうおもひ侍れど、おのれ、かき出だすになん、石出大春といふ人の、はし文あれども、これは畧す、

おもひぐさ

藤井行麿

○思ひ草は、秋の野の尾花がもとに、おふるとかや、または、このけぶりも、其名は、たぐふこゝちして、室のやしまも遠からず、とことはにこがれつゝ、人の口のはにのみぞかゝる、さるは、いひけたれても、猶深く思ひいれて、燃るけしきは、いぶきの山の、さしも草にもことならず、かくのみたえず、なげきせるはては、いぶせく、きたなげになりて、捨てらるゝよ、いと、かくわだある物とはおもへど、とあるごとには、猶世にえらず、をかしきものにてぞあなれ、かゝるも、むげに近き世のことぞかし、昔は、をさ〳〵名をだに、えらざりしものゝ、やむごとなきわたりまで、もて

はやさるゝも、いかなるにか、人の國にも、いにしへは、かゝる物ありとも聞えず、此ごろ渡りまうで來る書どもにては、こゝにも露たがはず、もてあそぶよし見えたれ、はるかなる世界より、此國に珍らしき物ども、あまた渡しもてくる人を、まれ／＼見るには、猶まさりて、あながちに、このめるさまなり、

○鶯の谷より出でし初聲よ、世もおしなべて、はるめきつゝ、やう／＼、風なつかしう吹きわたして、大かたの花の木ども、けしきだみ、梅は今をさかりにて、匂ひかすむ大空ののどけさに、そこはかと、あくがれ出づる春のひかり、かしらの雪もきえ果ぬべく、老たるも若きも、おのかじゝ、きよらを盡し、咎むばかりの香にしみたる、（拾遺集春　梅の花よそながら見んわぎもこがとがむばかりの香にもこそしめ）くれなゐの袖ふりはへて、ゆきかふ人を待ちまうけたる、かりのゆかなどに、しどしやすらひつゝ、まづとう出て、火もてことゝいひたるに、きよげなる女の、あは／＼しげにもて出で、なめげにさし置きたる、さるがう事など、いひあざれたる、いとをかし、

○有明のころ、ものへまかるとて、夜をこめて立出づる空は、月影くまなきに、やう／＼東の山際、あかりてしらみゆくほど、猶ゆくすゑは霧わたりて、はるかなる野邊に、をり／＼に、うちてたく火の烟あらはと、（後撰集雜歌　なり／＼にうちてたく火の烟あらば心さすかなしのべさぞおもふ）貫之ぬしのいひけむことなど、おもひ出でられて、ゆく／＼きり出でつゝ、とぶ火の光を、野守が庵には、あやしと出でゝや見るらん、かく

て、まだおもふさまならぬに、火の消えぬるは、をしきものなり、

行燈いふ、國の人、莨を喫出でしは、近きむかしにて、今より二百五六十年まへのことならん、歐羅巴洲の中、葡萄牙の人、肥前國長崎に持きたり、植ゑはじめしが、世にあまねくひらけしなり、元は南亞米利加、西班牙人、見出だしもちゐ初めしものといふ、いまは內地に繁殖して、產物の其一つとなれり、衛生上には、よからぬものから、人々さて喫そめては、やめがたきおもひぐさになん、

坊間流行の清樂は田舍節なり

尾崎なほ子

諸孃も兼て知られしならん、學の道の往來に見られしならん、坊間「清樂敎授」と認めたる看板、追追に增加し、令夫人方の交際は、此の家の合奏が基となるが常にして、誰家の處女か、爪音の忍びやかあるは、九連環にあらざれど、想夫戀なり、女性のみならで、學生の立膝に掻き鳴らして興がるもあり、髯生し、むくつけき男兒の、女房同伴にて、師匠の許に通稽古といふもあり、いづれ優美の音曲、之に若くものやはと、打ち興ぜぬはなけれど、此等流行の清樂は、其故國なる支那に持ち往かば、大抵田舍節なりといふ、清樂狂の人人は、眼を開いて下の條を見られよ、

支那地方にて、清樂と唱ふるは、現時我清樂家が、清樂と稱ふるものとは、自から異同あり、曲に昆

曲、即ち高腔と云ふあり、調に老調と云ふものあれど、都て是れ舊式の調曲にして、現時は餘程の好事家にあらざるかぎりは、之を彈ずるものなく、又解するものなし、或人に聞くに、近時北京傍にて流行するものは、時曲、時調と唱へ、其中最も流行するものは、百鳥朝鳳。打連香。十雙紅綉鞋。大五更。採茶。撒金扇。放風箏。四季想思。嘆十聲。老媽上京。綉紗帲。綉麒麟。十朶花。從良後悔。玉美人。二十五更。綉荷色。新五更。畫扇面。戲了環。刮地風。喜榮歸の類なり、又月琴に二樣あり、調を彈ずるものは、絲竿短くして、其音高し、曲を彈ずるものは、絲竿長くして、其音低引なり、調に三段あり、頭投と云ひ、二投と云ひ、三投と云ふ、其投に依て、樂器を異にす、二簧調。西皮調の如きは、通常胡絃（我清樂家の胡琴にして、長原派にて提琴と異稱するものなり）を合奏中に加ふるとも、西皮調には、胡絃乃ち胡琴を加へざること多し、而して當時流行せるは、支那南方田舍の舊曲舊調にして、其の中僅に、今日に存せるは、紗窓。抹梨花。剪々花。鳳陽調。補缸匠（鋸缸匠の誤りならん）。草名曲。四季。九連環。に過ぎずと云へり、然れども、其彈音の緩急に至りては、全く其趣を異にせりと、我清樂家を講ずるもの、亦一派の說あるや否や、

こぼれ梅

渡部乙羽

其二

京の嵯峨野を零落し身の捨處と、荒家の裡に佗びしく暮す浪人体の男あり。以前は播州赤穗の侍なりしも、主君淺野殿の雲隱れしたまひし後は、諸士其所此所に離散して、流浪の身の定め無き世に住み佗び、農と變じ商と化し、纔に口を餬する者の多き中に、これはまた世渡りの事を知らぬ男にや、たゞ徒らに座して喰うて、餓の來ん日を待つもの丶如し。よしや鷹は死すとも穗を摘まず、士は窮しても迷はぬものとは云へ、無爲に暮し居ては、米が天より降るものでなく、金銀は地から湧くものにあらず、働いて食ふにさへ、世辭辛き世の中なるよ、浪人の分際でお米庫の二つ三つも所有て居るらしいアノ顔色は。あア今の中に佩せる兩刀の鞘を外けて、槇木割にでもすればよいのにと、何日も近所に住む芋作が、口の端にかゝりぬ。

小唄に名高き嵯峨や御室も、花の盛りの過ぎ去りては、夜は淋しき片山家、野面の秋の裏枯れつ、嵐山颪そく〲と、荒屋の檐に音させて、窓に射し込む月影も、更けて一入冴ゑかへり、四隣物凄きまで寂寥せり。破れし垣根を結ひまはせし茅屋の裡には、病み衰へたる浪人男が、布團の上に起き直りて、隙間洩る風に瞬く行燈の

下に、愁然と腕組みしてうち凋れ、幾回か嘆息なして獨語やう。云ひ甲斐無き今の身上や、我も山岡覺兵衛とて、淺野の藩中にては、他人に知られし武士なりしが、かう零落れては存命ても詮なし。主君不慮の御最期ありし以來、仇吉良上野を覘けねらへども、時期到らねど手出しもならで、諸士其所此所に潜伏なし、敵方の隙を窺ふ折柄、如何せん我この病氣にかゝり、苦痛に窶れ貧に瘦せ、氣力頓に衰へて、復讐なんどは思ひも寄らず、餬口する道さへ盡きし儘、餓ゑて死を待つ苦しさは、想ふに前世に犯せる罪の深くして、斯くは武士道に外るゝにや、聖賢の敎にも君辱められ臣死するは理の當然なるに、病みて今迄生き延びしも、皆これ上野を討たんが爲なり、さればこそ一家中の面々も、あるに甲斐なき活計して、時節到來せんを待居らるゝに、我のみ武運に盡き果てゝ、座して死を待つ無念さよ、さりながら大石殿が御前途見屆け、その上にて割腹なさんと思ひ居たれど、今死なんも口惜し、別けて女房が心切を無にするは情無き業なり。我の病床に臥してより以來、朝夕の煎藥時刻を欠かせし事なく、馴れぬ世帶の繰廻しも、貧をぞ我に知らさじと、辛苦に弱る心も拘まで、今更自害がなるものぞ、あア辛らや、男並の武士一人が、生死の境に





身を置き兼るは、ねヽッ残念と、切齒をなして口惜がり、拳に落る涙をはらひて。それにしても山科の安否如何やら、大石殿は御無事なるか、都に遠き住居には風の便も聞くこともならず、あアまた木枯の音がするに、女房は、何故歸らぬかと、表の方をうち見遣りて、たゞ落涙に及びけり。

折から雨戸を押開けて。覺兵衛どの只今歸りました、途中で手間費りましたので、何時までも御不自由をさせました、今日は天氣も快晴つたゆゑ、市の方も豪らう賑かで、それは〳〵面白う御座いました、北野の天神さんへも參詣しましたら、恰度懇意な大原女に逢ひまして、變つた噂を聞いて來たが、ホンに人の心と云ふものは、明日は知れぬもので御座いますな、それはアノ山科に御閑居の大石殿がと、辞を切れバ覺兵衛思はず膝を進め。おう、その大石殿が如何なされた。まア斯うで御座います、アノ大石の御家老樣が、何うした風の吹き廻しか、後月の中旬から、祇園町の一力へ流連の御全盛、幇間末社に取卷れて、揚屋酒に入浸り、太夫とやらの膝枕に、たわいも無く泥醉て御座るとか、あれでは智恩院の鐘の音でも目が覺めまいと、見て來たやうな巷の取沙汰、妾も聞いて吃驚し、告げて呉れた女に別れて、祇園詣り

の序でがてら、近所へ行つて噂を聞けば、まんざら嘘でも無いらしい、こりや斯うして居る場合ぢやないと、急いで戻つて參りましたが、息が隙れる路が遠い、ホンに隙が入りました、御塩梅は如何で御座います、藥も煎じて置いた筈、もう召上りましたかと、慰むれども覺兵衛は默然として腕を組み、唇嚙みしめ居たりけり。良あつて顔を擡げ、女房ども好う聞いて來て呉れた、その噂耳に入れずば、何日までも大石殿を忠義無二の武士と心得、復讐の事打任せ置くのであつたに、あア賴み難きは人の心ぢやなと、口惜氣に云ふ夫の顔を、女房つく〴〵打瞻るに、眼もうるみ血色も惡しけれど、若しも風邪など感かんかと、脫ぎある夜着をかけてやり、其身は携へ歸りたる包みを解き、中より地紙取出して、扇折をぞ始めける。

覺兵衛それにジツと目を注け。女房そりや何品ぢや。はい〳〵これは六角の扇屋から賴まれた手内職、貴夫へ申上げるのをツイ失念して居りました。ナニ手内職！えッ誰が許してその扇引請けた、浪人しても武士の女房、町人のする手内職して、夫の顔へ泥を塗つたな、ろ其扇折氣に食はぬ、富を願はゞ再緣いたせ、この覺兵衛は暇を呉れる、出て失せよ、さア出て行かぬか、もう言譯は聞かぬ哩、我貧困に迫る

といへど、甲冑一領傳來の太刀一振は、死すとも側を離さぬ覺悟、さるを一時の貧に苦しみ、夫の許さぬ賤しき業して、病む身に藥餌を侑めんなどとは、その志卑劣く、ヱッ出て失せよと、驚き騒ぐ女房が、袖を摑んで戸外へ突き出し、閂かけて座に直り、涙に暮るゝぞ仔細あるべき。

文林

春風　近衛　忠煕

花にかをりやなぎになびく春風は
のどかなる世のすがたなり鳬

水上落花　東久世通禧

しのばずの池のさゝ波にほふまで
散りてうかべる山ざくらかな

佐々木高行

あしびきの片山ざくらしづのめが
水くむをけにちりかゝりけり

鍋島　直大

墨田川つゝみのさくらかぜふけば
みづの上こそさかりなりけれ

長岡　護美

わたつ海の磯山さくらちるころは

波のはなさへ香ににほふらん

山家春　黒田　清綱

山さともさびしさしらずなりに鳬

はるは花みるひとにとはれて

水上落花　高崎　正風

瀧のみづうづまくふちにちる花は

いくめぐりして流れいづらん

前田　利鬯

水の上にふたひら三片ちりうかぶ

はなによりくる池のうろくづ

宮地　巌夫

さくらちる木の下かげの池見れぞ

水にもきえぬゆきはありけり

花　中島　宜門

あたらしき花のよはひよ生の緒に

かけて慰れぞつくよしをなみ

さけぞちるみじかきはなの齢のみ

春日にとけぬうらみなりけり

水上落花　小田　粲

心してをぶねさしてせおほゐがは

ゐせきにたまる花やながれん

鏡　坂　正臣

おさな／＼くしけの鏡とりみんも

物うきまでにおいにけるかな

水上落花　植松　有經

水上はいかにちるらんおほゐがは

たえずながるゝ山さくらかな

谷　勤

夕汐はいまかさすらんすみだがは
　ちりうく花もながれざりけり

白祠松靄　松浦　辰男

しらひげの神のいかきのたい松も
　今朝のかすみに春をしるらし

風前落花　大口多比之

はる風のふきのまに〳〵誘はれて
　軽きははなのこゝろなりけり

花　上地　信光

日の本の國のひかりをやまかつが
　かきほにもみる花ざかりかな

あらしの日不忍の池にて　森　馬太

ふく風にさかまく浪をかきわけて
　聲のかぎりをなくかもめかな

古渡鷗聲　三浦　千春

すみだ川ふるきわたりのみやこ鳥
　昔こひしき音をやなくらん

花似雪　眞崎　雅枝

雪と見てうへるたもとに馨らずば
　はなとはしらじみよしのゝ山

國府津にゆくみちすがらよめる　何　多仁子

箱根山かすみのそこにきえのこる
　ゆきめづらしく思ふけふかな

水上落花　松平　健子

あるきてもゆくべき春のはな道を
　急ぐくるまになどのりにけん

流れくる花こそたえねかはかみの

つゝみのさくら風やふくらん　　鳥尾廣子

すみだ川おもしろくちるさくら哉
流るゝかたにふねはさゝまし　　山田稻子

大井川いかだのうへにちりとまる
はなは水にもながれざりけり　　安東菊子

名所花

櫻がりきのふはうへ野けふはまた
わすかの山につゑをひきてん　　尾崎すう子

海上の木こりといふことを

こりわびて蜑もなげきを積ならん
波のうへはふまつのゑたえだ

花似雪　　小杉浪子

ふりつもる雪にまがへてみ芳野の
山のさくらはちりそめにけり

燕　　眞崎淑子

いつのまに巢をや檐端に造りけん
つばめの雛のけふはなくなり

春旅といふことをよめる歌

藤井行麿

内日刺みやこをいでゝ　天ざかるひなの旅路に
ゆき向ふ心のべんと　家人にわかれしくれど
杖つきも衝かすも遠く　八重霞たちへだてつゝ
山もこゑ川もわたりぬ　屈指て日はかさなれぞ
草枕うとくもあらず　長日もあくとしはなし
花鳥のはるのあはれは　ゆきめぐる國とふ國の

何國にも菜の花さきて　ひとりさへづる

仝じく今様　　故森口邦救（上野人）

花をみすてゝゆく鴈の　心もさぞと思ふまで
如月やよひの旅だにも　故郷のみこそ忍ぶるれ

望遠鏡と顯微鏡

女子高等師範學校第三年生　吉村千鶴

火輪を旋轉して、海を渡り陸を走りて、千里を隣となし、一條の鐵線もて、山また山をへだてたる、遠きくに〴〵迄、またゝくひまに、物事を傳ふるなど、げに天も振ひ、地も轟く業をなんはじめける。これぞ我等の遭遇せる、十九世紀文明開化の花果にぞある。猶くしき器械ども、あまた發明あり。世の進みもいと著し。そが中に、かの蒼々たる大空の限りなきをも、窺ひきはめ、あるは、目にみえぬ細微の物まで、いと明かに觀察し得るは、そも何物の功ぞや。動物か。植物か。いな〳〵。望遠鏡、顯微鏡の二つになん。そも〳〵、望遠鏡のくみ立は、たやすからぬものにて、其さま、短簡にいひつくしがたし。されど、其骨とするは、大小のレンズにて、光學の理を應用し、大なるもて、遠き物体の光をあつめ、小なるもて、物像を明かにして、人の目にふれしむるなり。顯微鏡は、理は同じけれど、大小レンズの位置、うらうへなり。こは、細微のものを、幾百倍の大さに見んためなればなり。夫れ人眼は、視力に限りありて、見るところの區域ひろからず。物体は、視域の外

にあれど、明かに認めがたし。人々、ひろき原野にいで丶見渡せど、世界のものは、皆わが目の内にあるが如く覺ゆれど　さて其物体は、如何と視察せんには、甚難きを知るならん。ましてや肉眼に、みとめがたき至微至細の物は、いかにしてかは、視察し得べけん。この足はぬを補ふものこそ、二つの鏡のわざなれや。あゝ、いちじるき世の中の進みかな。古の人のとなへたりけん言の葉と、今の世に行はるゝ學の説とをくらべ見ど、われも人も、いかなる感かおこる。雲のはれたる夜はに、久方の空を仰ぎみれバ、明けき月のほかに、群れる螢火の如く、そこらかゞやくをみん。われ人の、これをほしとぞいふなる。人文開けぬ昔は、此ほしといふものは、天つ空たる金の光るにて、そが東より西にめぐるは、天のめぐるにつれてなりと思ひたりしを、ケプラーガリレオなどいへる大學者いで、かつは此望遠鏡の發明ありて、やう／＼、此事明かなるに至りぬ。その説に云へらく、われらの住める地球も、星のひとつにして、他の殊に、大きく見ゆる七八の星と共に、大陽の周りをめぐれり。其他數ゑられぬほしは、皆大陽及び地球と等しきものにて、月のみは、地球の周りをめぐれり。かくて地球は、自らめぐりてやまざれど、あまたのほしも大陽も、東より西に行くが如く見ゆるなりとぞ。さるは、大陽といへど、いと大きやかなるに、これに等しきもの丶、かく螢火のごと見ゆるに、そのへだゝりの遠き事、宇宙の廣大なる事も、思ひやらるゝになん。さて、望遠鏡の力

により、世に知られし星のかずは、万もて計ふむかりなりとかや。中にも著きは、木星、火星にて、木星には、われらのよなく、仰ぎ見る月の如きもの、四つあるが、周りをめぐれりとぞ。火星は、大陽系中、わが地球には、距離遠からぬもの故よ、星學家の推測も、よのほしにくらべては、やゝくはしきにや、此星には、我地球の如く、空氣もあり、水蒸氣もあり、山あり、川ありて、植物は繁茂したらんかといへり。されどこゝにも、社會てふものを造りて、われらの如く、交際して、日をくらす動物もあらん。かの世界の人は、また我地球を見て、星と思へるにやあらん。かゝる相像にも及びがたき宇宙の事も、此鏡により、明かに知るを得るに至りしは、學術の進歩とはいへ、奇しき事にこそありけれ。天文學も、これによりて、昔の面目を改め、曆を造り、航海に用ゐ、氣象を察し、時辰を報じ、あるは、慰みのためにも用ゐるは、其功其利、大なりといふも、いとおろかなりや。

顯微鏡の出で來しよりは、生物學、生理學に著き進歩を與へ、醫學もこれより姿を改め、近來唱ふるバクテリヤ說のいできしも、皆此鏡の功なりき。わけて生物は、形のまゝ創造せられしにはあらで、一つの細胞よりなるといふ、不思議の說をも唱へいでたりき。いな、となへいでたるのみあらで、此鏡もて、其組織をもたしかむるに至れり。されば、解剖學上に、著き便を與へたり。かくて、此鏡により、知られし生物の數は、幾百千種なるを

わきまへがたし。見よ、溜水の一しづくを、針上に點すれど、透明純潔にて、ちりだになかるべし。あはれ、昔なりせど、かくて人々滿足したらんも、此鏡の一たびてらすときは、一滴の露の內に、幾千の小動物、をどり舞ふをみて。おどろくならん。げに二鏡の功こそ、兄たりがたく、弟たりがたきものといふべけれ。されど、此鏡の功、大なるのみならで、こを發明せし人こそ、いとも〳〵奇しく貴けれ。あゝ、ガリレオの心は、宇宙をもつゝみけん。其魂は、至細分子にやこもりけん。五尺の身、短しとせず。百年の命、はやきを憂へず。いよ〳〵學を修め、業をならひなど、大空をもつつみあまる業も奏し得らるべし。多望なるかな。われらの身。幸にして學の道に入り、教育の任にあたるうれしさよ。はげみいそしみ怠らで、我國第二の國民を導き、ガリレオケプラーにも、優りこそせめ、おとらぬ人をいだし、御國の光を、海の內外にかゞやかしめんと思ふも、かたはらいたきわざなりや。

船路の記（つゞき）　故人藪氏

二日、兵庫をたちて、生田に出づ。大神宮にまうづ。馬場は、桃櫻交りて、花の春こそ、おもひやらるれ。石の燈籠、おほくつゞけり。おはむ神は、わかひるめのみことゝ申し奉る。大神宮の御妹宮にて、おはしましぬとかや。左に梶原のえびらの梅、右に姿見の井とてあり。妹は梶原何がしの妻にしあれば、此梅を一ついたゞき

て送らむやと、ふところにす。いくた川、みなと川、水かみは流有りとも、末に至ては水なし。廣く流れし河原のみあり。山深く立ちいりて、ぬの引の瀧を見る。世にひゞく瀧の姿、いはむかたなし。瀧壺のなけれど、いとよし。くり返し、みもあかで立てり。

山姫のこゝろ長くも打ちはへて
　幾よさらすや布びきのたき

行く〳〵、尼が崎にいたる。此ほどは、松のとて、山幾重も〳〵、こえて行くなり。あまが崎より、日暮がたに、舟に乗りて、芦間がちなる入江をわたる。二日の月の、それとむくりみる程もなきに、宵の明星の光、さし添ひぬれど、おぼつかなしや。

みずも非ずみもせで今宵赤星の
　光にたどるなにはえのふね

暮果てそこともしらぬ難波江や
　舟こぎまよふ蘆のひま〳〵

人はみな、ふしぬれど、寝もやらで、名にしおふ所から、さだかにみまほしの心やます。いつとなく、行くふねのとゞまりて、皆人のあがりぬれど、うちつれてあゆむ。ほど遠からずして、子ひとつばかりもあらむに、中の島につきぬ。ともなふ人の相しれる、何がしのがりおとづれぬるに、とばそおし明けて、あるじの、いとめづらしといふに、かりの宿ともおもはれず、さしいりける。(未完)

雜報

●幽貞　女は幽貞の德なかるべからず。女は幽貞の德を養はざるべからず。眞に婦人の德は、幽貞に在り。われ〳〵は、曾て孃達に、いひをらずや愛でたき櫻の花に肖ねて、淸くにほはしき大和心を養ひたまひねと告げたりしが、今はまた、幽貞の德を養ひたまひねと告げんとす。そも幽貞の德は、何によりて養はんか。吾人は思ふ。この德は、翠をたゝらんとする夏木立の若葉の奥ふかき茂みが中にありと。あゝ若葉。その芬芳、梅にたぐふべくもあらず。その艷麗、櫻にたとふべくもあらず。されど、幽貞の德は、正にその深翠の中にこもれり。あはれ。大方の孃達。こを見愛でたまひて、深く幽貞の德を養ひたまひね。あなかしこ。

●死後の榮譽　維新の際、勤王の志厚く、奔走盡力大方ならざりし、舊近衛家の老女、贈從四位津崎村岡刀自の傳記は、曾て本誌に掲げたりしが、先月十六日、其の義子六條定光氏、刀自の建碑落成式、並に贈位祝祭を、其の建設地なる京都嵯峨大覺寺境内に於て執行したりしに、貴顯名士の會するもの、殆ど三百名に及び、殊に盛大に、祭典を擧げたりきといふ。聖明の慈仁、白骨に及び、贈位の榮典にあひたるさへあるに、此の盛大なる祝祭を享く。刀自地下に在りて、當に瞑すべき乎。

●奇特の女生徒　島根縣尋常師範學校附屬小學校生徒松原たかは、今年僅に十歳一ヶ月の少女なるも、平素奇特の行あるよし、人々噂しあひけれど、全校にては、人をして實地に就きて、之を取調へしめたるに、實に聞きしにも勝りて、感ずべきことのみ多かれど、夫々賞與の手續を行ひたりといふ。そもたかが父は藏一(四十三)といひ、青貝細工を營業とせり。母は六年前に死去かり、八十有餘の祖母と三人暮しありしが、その祖母も、一昨年の夏失せて、今は父子二人となりぬ。固より豁なるにあらざれど、人を雇ひ入るゝ由もなく、食事、洗濯、洒掃のわざ、悉くこの少女の手一つにて爲し、少かも父を煩はすことなしとぞ。たかは又、父が日々緻密なる細工をなすをもて、時々肩擧を起すを憂ひ、いかにもしてその勞を省かんと思ひ、晝は貝類を磨きなどして、幾分か父が手助けをなすにあらざれば、敢て遊ばず。夜はその肩を打つにあらざれば、假にも寢ねず。其の所作、殆ど大人も及ばざる程なり。されど、親戚知己のものども、藏一に後妻を迎へんことを勸むるも、われにたかあれど、家政に何も不便を感ぜずとて、之に應ぜずして、今日に至りしとぞ。さてたかが、該校に入學せしは、客年十月にして、爾來日々夙に起きて、自ら髪結ひ、朝餐の用意をなし、父の起くるを俟ちて、共に朝餐を食ひ、跡取りかたつけて、初めて登校し、學校より歸れど、晩餐其の他の用事をなし、他の兒女等と遊ぶことも、いと稀にて、鄕人等感服せざるものなしといふ。か

かれど、學校にありても非常に勉强し、學業の進歩、殊に著るく、諸學科とも、はるかに他の生徒よ超えたりとぞ。あはれ、めづらしき少女にあらずや。あはれ、少女よ。なほたゆみなく、いそしみ務めて、令名を永遠に全うせよ。

●演説　こは棚橋絢子ぬしが、女子成立學校卒業式のとき、演説せし筆記なり。諸孃の一讀すべきものと覺ゆれど、こゝにかゝげぬ。

今日は例年の通り、第五回の卒業式と、第六紀年會とを兼ね、其式を擧げますに就き、何か新工夫の珍らしき面白き御話でも致したいと存じましたけれども、何分先月より、良人の病氣看護にて、身体も思想も共に疲勞して居りまするし、御承知の通り、不學短才の私故、格別面白い珍しい御話と申す樣な者が、心に浮びませんでした、然れども、折角推して此式場へ臨席致しました事故、卒業生たる方々に向て、一言の餞別を致しませんければ、心が濟まぬ樣に思ひますから、不辨を顧みず、御退屈を買ふ樣な者ではありますが、私が常々、あなた方の御身の上に就き、蔭ながら心を用ゐて居りまする一事を、御話し申す事に致しました、其は餘の義でもありません、あなた方は、是から政治家に御成りなさるのですが、何せ御成りなさるなら、立派な政治家にあつて、世間に譽められる程の御人物に御成りなさい、決して、でも付の政治家となりて、人に後指を指される樣な御人物に、御成りなさるなと申す事であります、私が斯樣な

事を申しまするど、棚橋絢子は、氣でも違ひはせぬか、女の政治家などゝは、今日が聞き初めぢや、其樣な者が世間に在るものか、此鹽梅では、法律學校などの卒業生にでも述べさうな演説をしやすまいか、女子成立學校の卒業式に、校長の身分として、怪しからぬ言を吐く人であるなど丶、御疑ひなさる御方もありませうが、私は決して氣も違て居りません積でありますし、又本校の卒業式を、法律學校などの卒業式とも間違へては居りません、唯々私は、昔し紀貫之朝臣が、土佐日記の初めに、「男もすなる日記てふ者を女もすなり」と書かれた口調を學ぶではありませんが、男子に政治家と言ふものが有る通り、女子にも政治家と云ふ者が有る事を信じて居ります、今一層言を强めて申しますれど、男子には幾通りも專門が御坐りまして、政治家、文學家、商業家、工業家、農業家、など申す大別がありますれど、女子には殆ど一つの專門しか御坐りません、其は前にも申しました通り、政治學ばかりであります、更に之を註釋致しますれど、女子の專門は、唯ゝ一つの家政と申す政治學でありまして、女子の學ぶべき事は、甚だ多き事でありますけれど、皆此政治學を研究する爲の輔助に過ぎません、裁縫を學ぶも、文學を學ぶも、算數を學ぶも、又其他生理、博物、物理、化學等、一切の學問をするも、皆之を以て、あなた方が他家に嫁し、一家の細君として、其家政萬般の事を整理なさる爲

でありまして、男子の樣に、其中の一つか二つを專門として、活計の基本となし、若くは社會發達の補助となすのではありません、勿論女子にても、一家の不幸などに遭遇して、或は其の學び得たる所を賣り、以て其活計を立つる樣な人がないでは有りませんが、是等は全く變則でありまして、女子の本分と申せば、先づ他人の家に嫁し、其家政を整理するが第一で、或は奴婢の使役、或は子女の敎養、或は一家經濟の始末等に關する事務を支配するが、正則の仕事であります、而して本校の目的とする所も、亦斯の如き重任に當るべき女子を敎育するにあります、故に私は、あなた方が是から政治家に御成りなさると申しましたのでありまして、今日此席で、政治家に御成りなさるゝ注意を致す譯であります、

さて是から、本日私が一言申し上げたいと思て居ました御話に取り掛りますが、之を約めて申しますれば、唯々從來あなた方が、本校に於て御修業なされた事を、善く實地に應用して戴きたいと言ふに過ぎません、然し此の「善く」と申す一言は、中々深い意味を以て居ます文字でありまして、あなた方が、單に御修業なされた事を實地に應用あさるばかりでは、決して「善く」と言ふ詞の意味を盡したとは申されませぬ、何方にしても、御稽古を爲さるのは、之を實用に充て樣と云ふ心持で爲されるに違ひありませんから、御稽古なされた事を、　（つゞく）

歌の庭

五月五日兼題　卯花

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　愛媛縣松山市萱町六丁目　田村千代子

咲く花の雪にまがきはうもれけり
　ゆひしうつ木は少なかれども

地　香川縣香田郡觀音寺町　阿南慶子

夜をのこすかた山かげの卯の花は
　ありあけの月の影かとぞ思ふ

人　熊本縣菊池郡隈府町　千々波橋子

さむからでつもる雪かと立寄りて
　見れどさかりのうつ木なり鳧

人の位　熊本縣山鹿郡山鹿町　富田仁壽子

ありあけの月のひかりと思ひしは
　夜のまにさけるうつ木なり鳧

時ならでつもれる雪とおもふまで
　ましろにさけり庭の卯のはな　高井繁子

水の音の垣根まぢかにきこゆなり
　うの花にほふたまがはのさと　伊藤かね子

はるくれどとふ人もなき山さとの
　世をうの花のさかりなりけり　河野文子

眞柴垣たわにもさける卯のはなは
　時わかぬ雪の積もるかとみゆ　武智卓能子

ときならぬ雪かと見ゆる卯の花の
　盛りはやみの夜もなかりけり　里吉盈子

朝ぼらけ雪か花かとまがふなり
　ましろにさける垣の卯のはな　里吉照子

山さとのかきの卯の花さくころは
　きえ殘る雪とみえもこそすれ　佐々有鄰子

さきにほふ垣根つゞきの卯の花は
　月のかげかとうたがはれつゝ　澤田春子

時ならぬ雪とまがふはやまさとの　永易たきの

垣根つゞきにさける卯のはな

わがやどの垣根おしなべ白たへに　永易いくの
雪かとまがふにはの卯のはな

卯の花をまがきとなせるわが宿は　松井民子
くれても暮れぬ心ちこそすれ

ゆくはるのなごりもきえて生垣に　藤井艶子
雪かとばかり卯のはなの咲く

ときならぬ雪と見るまで卯の花の　佐藤みゆき
今をさかりと咲きにほひけり

ほとゝぎすたづね入るさの山影に　尾崎直子
今をさかりとさける卯のはな

しづがやの園の卯の花さきにけり　伊東喜代子
行きかふ人もたちとまるまで

なつごろもほしゝまがきの白妙に　植田貞子
咲きまがふなり卯の花のゆき

さらぬだに短きものをなつの夜の　稲田君子
あかつきはやく見する卯の花

遅さくら匂ふさかりのみちのべに　稲田晴江
はや卯の花は咲きそめにけり

かげともの谷間に咲ける卯の花は　勝家貞子
消えあへぬ雪と人や見るらむ

たにかげの雪とまがひし卯の花は　勝家良子
月のかげともあやまたれけり

竹垣のくづれもみえず卯のはなの　南大路素子
垣根しろくも咲きにけるかな

よそめには雪とやみらんわが宿の　南大路正子
垣根のうつ木はなさかりなり

ひさ方の月もそれとは知らざらん　南大路芳枝
世をうの花はさかりなれども

ときならぬ雪かと見えし卯の花も　山中糸子
夜半には月のこゝろこそすれ

白妙につもれるゆきとみるまでに　瀬戸里子
なべてましろく咲ける卯の花

昨日見しさくらの雪もしのばれて　植木鋼子
あけぼのの寒く咲ける卯のはな

やまざとはまだ夏しらで冬ごもる　狩野秀子
雪かとまがふかきの卯のはな

卯の花のさきの盛りのわがやどは　福木稲子

やみてふこともしられざり鳧

ぬばたまのやみにもしろし白妙の
垣根つゞきに咲きける卯の花　押尾　菊子

ゆきくれて越ゆる深山の夕まぐれ
月のひかりにまがふ卯のはな　堀田　安子

うばたまのやみにてそれと白雪の
積もるがごとく咲ける卯の花　内田　慶子

雪や降ると小野の山里訪ひ見れば
うの花咲ける垣にぞありける　茂木　歌子

夕まぐれひかりをそへて卯の花の
いよ／＼月にしらみぬるかな　土屋　貞子

春すぎて夏やきぬらし卯のはなの
かきねましろに咲き初めに鳧　土屋　貞子

白妙のつきとゆきとのおもかげや
しづけき里に咲ける卯のはな　島田　悦子

時わかずつもれるゆきと卯の花の
まがひてさけるたまがはの里　松田　静枝

ぬぎかふる人にならひて夏きぬと
垣根の卯つ木しらかさねせり　松田　石子

卯の花の咲ける垣根をとめくれば
そでにおとせぬ浪はたちけり　松田　元子

縄くちてゆひめしどろのあし垣を
つくろひ顔にさける卯のはな　橋本　数枝

かきつゞき匂ふ卯の花さきみちて
月かとまがふにはのゆふぐれ　白上　松子

白妙のころもとみしはやまざとの
かき根に咲ける卯つ木なり鳧　杉谷　正子

我門のかき根ばかりにしらゆきの
ふるかと見ればうつ木なり鳧　青木　春子

そゝぎつる夜の間の雨は雲なれや
今朝おもしろくさける卯の花　河南　龍子

雪をれのこゝちこそすれ撓めたる
たけのまがきに咲ける卯の花　河南みよ子

沖津波よるかと見しは海士の屋の
卯つ木の花の咲けるなりけり　藤澤　元子

庭もせに咲けるを見れば時ならぬ
ゆきかとまがふ垣の卯のはな　高橋　政子

しろたへのころもほすかと思ふ哉　山田　先子

卯の花さけるとはやまのさと

五月五日兼題　學校の事を記す

天　長野縣長野町　勝家貞子

昔は幼き子を敎へ育つるとはたゞにかしつくおうなのみにまかせおきたれどもとよりその道とてもなくやゝ生長にいたり寺子屋てふ所に入門せしめてたゞに讀書を習ひ得たるのみにてそれさへたゞしく學び修むるものなかりしを明らけく治まる大御代にいたりては都も鄙もなべてかはるとなく千島のはても沖繩のきはみもいたる所として學校てふものを設けられ猶又幼き子を育つるには幼稚園てふものまでも立て加へられてやんごとなき人の子はさらなりいやしきおのれらのわらはべさへも一つ莚につらなりてこと〴〵やすらけくひとなみに學び修め得べきとはなりぬひらけゆくめでたき聖の御代にあひて何事につけてもいと喜ぶべきとおほかるをましてかう文の林の茂り榮ゆかむはいとも〳〵ありがたきことになむ

地　大坂府西成郡今宮村　松田靜枝

水きよき澱のながれ金城の甍をはるかに望むところに大坂高等女學校を設けられぬ大方の姫たちこゝに集ひて雪の光螢の燈火に學びの奥を尋ね玉へりあはれ武士が手束弓は秋の田の案山子に餘波をとゞめ吹く風も枝をならさぬ聖の御代に生れいでたる嬉しさには一字千金の貴き文の道をたやすく學びうるかたじけなさよされど學校にいり學びの道をひるに夜にいそしみつとめてこの大御惠に報いたてまつりてこそ賤の少女の本分なれさるにいづちの女學校にまなび玉ふ女學生かはしらねど英語とやら獨逸語とやら物しり顔に話し玉ひ活潑とやら磊落とやら大道狹しと歩み玉ひ露恥ぢ玉はぬとやあはれいかに御身らは學にたけ智にとみ玉ふにせよ御國の國柄を忘れて外つ國の人をまなびしとやかに物やさしき女性の德をよそにして今更いかにして女の道を辿り玉ふぞ妾世に女子敎育の爲にとて心をいため玉ふ方々の志を忍ぶごとに此のゐせ女學生のふるまひのいとゞ胸にせまりてこた

びの題に向ふもかへすぐ〜歎かれて一言かくなむ

人

千葉縣佐倉町宮小路　植木　鋼子

我國古へより學文のさかりおとろへたるさまぐ〜なれど今明治の御代しろしめすすべらのぎかしてくゞ深くこゝに大御心をとゞめられ九重近き都の内はさらにもいはず天下るひなのはてまでも學校の設けあらざるなくたきゞこる賤の少女あざりするあまの子供も皆學びの道に立いらぬはなし文の道にまれ業の道にまれ各はげみて御國につとむるいはゆる日本心をみがき西洋の外つ國々と並び立ていちじるき君がみいづをかゞやかす其いしづゑははたいづこにか有る皆此學校よりぞやしなひ起すべきものになん

佐々有鄰子

某の小學校に修業證書授與式あり二人三人の友だちと參觀を校長にこひつれだとみにゆるされぬ式場の正面に至尊の御影を奉祀せる小祠あり廣前の高机には櫻花枝もたわゝに大瓶にさしたるが春風ゆはびかにかをりてゆかし修業の生徒は訓導にしたがひつらを正してこゝに來りぬかゝりの長は一わたりの演說ありて修業證書を甲乙の席次に授與せらる奏するもの〻音は雲ゐはるかにひゞきていときよらに耳をすましつ終ぬれど生徒の一人が立出で今日の答辭をいふにやさしくけいしぬ實に末たのもしき二葉の松のわか木になもありける此學校の千代の榮はいちじるく敎草はみどりふかめて八百萬の春やしげりゆくらんあなめでたの敎の式やいとたのしき敎の場よと感心の事を記す

田村千代子

むかしもろこしの某の母は其子の爲に三たびやどりをかへいやはてに學校のかたはらに移りすみて遂に其子を世の物しり人となしぬときゝしが今わが國にてはいづれのかた田舍にても學校の設ありて等をわかち級にしたがひて子弟を敎ふれど殊さらに其かたはらに移りすむ處にもおよばずまた笈を負て良師を千里の外にもとむる勞もなく書籍は

あまりありて筆墨も乏しからず書籍をもあつめで疑はしきふしはがらすの窓のあきらけくさとり得て村のうちに物學びぬ人とてはなく家の内に書よまぬ子とてはなくなりにたるはみな大御世のひかりなりかし

清水よし子

生れつるより二つ三つ年を越えぬれど幼稚園といふ處ありて數多の稚子など集めて父ともなり母ともなり亦乳母ともなりて數限りなき物事など敎へつゝ人の世に立つ初めをぞ導きける昔にありては三つ四つ位の乳くさき稚子など世話するものはいと賤しき人のするとゝて卑きものになくど絕て世話するものもなかりしが御世の開けてより多くの貴き人など相集ひて斯くは乳くさき稚子まで世話するとぞ有りがたきとの限りならずや己等性善からずして幼稚園とやらの敎へをうけず漸くにして小學校に入り尋常科四年心なくも文讀むとなど敎へられ十歳の春高等科に入り地理物理歷史修身作文算術など云へる種々の敎を受け國に盡すと親に仕ふる務め子を育つる方法など其概ましを覺えてよなき仕合と日每に喜ぶ其樂しさいはんかたなし聞きつれど未だ已等小學校の業を卒へてより上に二つ三つの學校ありと其敎は裁縫、點茶、活花・和漢文、家政、などにて多く財ある人貴き人の子等の入る處と思へどさぞかし其學校を卒へ世の母となる人等こそ樂しきと幾許ならめ己等僅に小學校を卒てすら其樂しさ大方ならず況して高等の科程を履み世の母となるに於てはいかならん思へどいとゞ悔しきは家のくらしのまゝならぬにぞありける

さりとはいへ亦己等小學校の敎へをうけつれど世の中のとあらましは習ひも玄つれど誰すべきは盡し履むべきは履み人に後れをとらぬ身となりぬれど數多くの敎へなき人だちより已等の優る幾等か思ひ直せど亦さしたるともなし獨りつらく思ひて此記を作る

卯花　延若

夕づくよ賤がかきねの卯のはなを　沖田みさを
なみのよるかと打見つるかな

白雪のふれると見しはませがきに　小山みゑ子
卯の花にほふあしたなりけり

谷川のきしの卯のはな咲きつゞき　碓井信子
賤がさらせるぬのかともみゆ

時ならぬ雪かと見しは卯のはなの　碓井武子
いまを盛りとさけるなりけり

卯の花を窓のひかりにうゑてまし　小山若子
まなびの庭のやみもなきまで

谷ふかくのこれる雪とおもひしは　栗本粂子
きしの卯の花さけるなりけり

いつとなく春をへだての垣ひとへ　佐藤敬子
皆しろたへのその卯のはな

みどりのみのこる櫻の木がくれに　佐藤蝶子
我れのみ見よと咲ける卯の花

雪とのみあやまたれつゝ卯の花を　足利世根子
わけゆく袖ぞすゞしかりける

ふりつもるまことの雪の心ちして　森田てる子
今をさかりのかきの卯のはな

木隠れし家居もよるはあらはれて　森田とく子
ひとむらしろき垣の卯のはな

ふりつみし雪にうもるゝ家居かと　森田とき子
見るまでさける垣の卯のはな

學校の事を記す　延着　足利世根子

養花女學校のあるじはわがふるき友にて一度たづねむやとおもふをりから來て見てよとの消息ありければ行きて校のさまを見ることゝなりぬ校舍は都の片ほとり根岸となんよぶ里の入口にあり南向七間四面ばかりの二階家にして構の內は二千坪もありなん四方は靑き竹垣もて結廻らし庭の內には四季の草花くさ〲植ゑ並べぬさては主の手すさびにあんなれと見巡るに櫻はのこりなうちりたれど牡丹芍藥の綻びかゝるあり築山のあなた池の汀には菖蒲杜若の今を盛りと咲出るを見て主人が平生培養の心盡しいうぞかりぞとかんじいりぬ

案内につれてそこはかと教場を巡るに裁縫の業習ふもの花さす術を學ぶものあるは讀み書きに餘念なきものなど彼是四五十人ばかりありまた咲出ぬ未通女の今を盛りの乙女に交りイ睦しう物學ぶさま優にやさしく庭の花もはぢなんばかりのうつくしさねもいはれず倘其業も皆々よく進みたるを見て主人をはじめ教師達の日頃の骨折のさま察せられぬ

實に人を教ふるは花を育つるよひとしく出りたるを撰め咲おくれたるをいそがし恩の路をそゝぎ威の光りをあたへなど校主のこゝろつかひ大方ならじさては養花女學校と名づけしも理になんはべる

兼歌
- 五月廿日
  - 歌……深夜郭公
  - 文……五月雨
- 六月五日
  - 歌……楠母
  - 文……人の學校卒業を祝ふ消息

投稿心得

兼題歌文は婦人は何人にても投稿することを得但し一週日前よ本社に届くやうにせらるべし

宛書は必ず國光社編輯部御中とし用紙は白紙にても罫紙にても半紙形を用ゐ文字は鮮明に書かるべし

投稿歌文中より天地人の三首を撰り天に三部地に二部人に一部女鑑を送呈す並にすべての歌文は悉原稿到着順に本誌教の庭に掲載すべし

（完）

女子書牘文論

皆斎田改　目黒和三郎

（完）

文學小傳

難波津浅香

○文林

歌

一首　千種有任
一首　松岡調
一首　會田安昌
一首　久我建通
六首　鍋島直大
一首　本居豐穎
二首　有住齊
三首　前田利嗣
一首　竹屋光昭
一首　石丸忠胤
一首　林信臣
三首　佐々木高行
一首　都々頁一如
二首　糸山貞幹
二首　小澤幸民
三首　関大久樂
四首　毛利元德
三首　宮地嚴夫
三首　前田利鬯
二首　内藤存守
一首　岡田朝太郎
一首　米山勝太郎

十首　植松有經
二首　松浦詮
二首　内藤燦聚
一首　久我通久
一首　土方久元
五首　岡部譲
九首　藤井行慶
二首　津輕承昭
三首　松浦辰男
二首　小田清雄
一首　鈴木榮
一首　大槻季夫
四首　西川須賀雄
四首　三浦千春
一首　神本國臣
一首　坂本德一郎
二首　黒川眞頼
三首　德大寺實則
一首　前田利昭
一首　黒田正隆
二首　栗原宣太郎
一首　村上秀發

二首　長岡護美
一首　有吉秀太
二首　長瀬鏡子
二十首　小池道子
一首　黒田禮子
一首　獅石文子
一首　三村萬壽子
一首　高橋政子
八首　柳原愛子
二首　千種任子
二首　園祥子
一首　姉小路良子
八首　松平健子
七首　安東菊子
一首　眞崎淑子
四首　鍋島榮子
四首　前田朗子
二首　鳥尾廣子
二首　鶴久子
一首　河野文子
一首　伊藤ちせ子
一首　西四辻茂子

一首　波渡里華清
九首　税所敦子
二首　井口鶴子
一首　獅石學子
一首　江崎操子
十四首　尾崎すう子
一首　下田歌子
六首　三輪田眞佐子
二首　小倉文子
二首　野村てふ子
一首　北島以登子
三首　中島歌子
一首　小杉濱子
一首　中村たけ子
三首　蜂須賀隨子
一首　平塚千代子
二首　山田稻子
二首　千々波橘子
一首　溝口奈保子
一首　安藤生子
一首　三宅三枝子

長歌

新體歌

今樣

文

女鑑第三十七號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麴町郵便局へ御振込可被下事○郵便劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領収書差出さず金員領収の上は直に女鑑を發送すべし若し強て領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月二回五日廿日發行

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金十五錢

明治廿六年五月四日印刷
同年同月五日發行

發行兼印刷人　東京麴町區平川町六丁目十二番地　川崎直衛
編輯人　東京麴町區平川町五丁目十六番地　山根勇藏
發行所　同　國光社

國光は忠孝節義の士氣を激勵し固有の美風良俗を扶植し以て邦家進取興隆の基礎を鞏固にし殖産軍備教育の法廣く宇内の秀美を蒐め富强の策を講するを務とす其時事を評し活勢を論するに當りては公平の眼を以て大局の上より國家の利害を觀察し太古に溯り萬世に亘り時流を趁はす世好に投せす卓然獨立正言公議眞理中道を得以て國光を世界に照被するを旨とす

（明治二十四年八月八日內務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）

國光

毎月二回發行
十日廿五日
一冊代金拾三錢
但全國無遞送料

國光第六卷第壹號目錄

發行所
麴町區平川町五丁目
國光社

（赤坂區赤坂田町二丁目十五番地國光社印刷部印行）